

過ぎ去りし日々は光茶色となって……

3年F組担任 吉成 正士

1 序

青のペンキで塗られてはいるが、所々剥げかかった扉を、押し開ける。木製の扉特有の、動物のうめき声のような音がする。キイーッ、バタンッ。古びた椅子に、ほこりっぽいテーブル。扉の音を聞いてか、はたまた鋭い嗅覚を発揮させてか、飼い犬のイングリッシュ・セッターが私の人物を探りに跳び出てきた。私は犬に構うことなく、窓際のいつもの大きなテーブルの椅子にドンッと座った。奥でテレビを見ていたマスターが、投げ出していた足を引っ込め立ち上がったかと思うと、途中グラスに水を入れながらのっそりと出てきた。がっしりした体格も、後ろに束ねた長髪も、いつもの無愛想さにも、変わりはない。「紅茶一つ」ぶつきらぼうに投げかける。「紅茶一つ」これまたぶつきらぼうにに応じて、カウンターに入って行った。この店に初めて入ったときは、冷ややかな冷たさが嫌であった。現代社会の象徴のようにも思えた。が今では、それとは全く逆の温かみを感じているのが、なんとも不思議な感じだ。それは、イングリッシュ・セッターの存在であるのかもしれないし、この店を形作っている古びた木の温かみかもしれないし、また、2つの耳からすんなりと心地よく入ってくる年代もののBGMのせいかもしれない。私は、店の中の眼に入ってくるものを、ただ何も考えずに見渡していた。そういった空白の時間をもて遊ぶことを楽しんでいるのだ。今までの凝縮された時間を懐かしむかのように……。

紅茶が届けられた。やはり無愛想に届けられた。私は紅茶が好きだ。初めはコーヒー党が多いことに対する反発であったのかもしれないが、今ではそれが当然のこととなっている。私はテーブルに肘をつき、届けられた紅茶を両手のひらで抱えて持ち、冷たい指先を温めるようにしながら、白いティーカップの中で揺れる紅茶色を見つめていた。

紅茶色は、過ぎ去った過去の色をしている。なつかしくあり、またそれでいてすがすがしい爽やかさを感じさせてくれる。それは校茶色であり、幸茶色であり、また光茶色である。この1年間に自分に起こった出来事が、今あらためて、私の頭を駆け巡る。きらびやかに回転するメリーゴーランドのように駆け巡る。つくづく「自分は幸せだ」と、心の中で呟いている……。

2 出会い

3年F組の生徒達と出会ったのは、まだ冬の名残の空気の冷たさが肌に感じてはいるが、暖かな春の日差しが少しずつ凍った心を溶かしてくれていた4月8日の始業式であった。と言っても、一昨年担当していた学年でもあり全員が顔見知りであったので、別段特別な不安感はなかった。むしろ、教員となって初めて同じ学年を2回目受け持つようになったことで、このうえない期待感や喜びを感じていた。同じ学年を2年、3年と受け持ちたいという願いが私には強くあった。したがって、私には本当に待ち望んだ4月8日であった。そしてその4月8日が、私の人生観を大きく変動させた、記念すべき第1日目でもあったのだ。

34名の生徒達と出会い、今年も「峠」の詩でスタートをきった。私は国語が大の苦手であるが、それでも、この詩には息を飲むような感慨深さを感じていた。それは年々年を増すごとに膨らんでいく。不思議だ。

※

『今日の授業が終わって思ったのは、私は前に“失うことをおそれては、何も得ることはできない

い”と思っていたけど、YYちゃんが言ったみたいに、どちらかを選んで、もう1つの方を失うことになっても、その方を忘れずにいようと思い始めました。確かにその通りだなあと思いました。けど、忘れないというのは「やっぱりあっちの方が良かったなあ」と引きずっていくものではありません。そんなことを思って生活しても、自分で自分を苦しめるだけで、全然楽しくないんじゃないかと思います。私が「峠」を越えるとき、“過ぎ来し道はなつかしく、開け来る道は楽しい”とあるように、今までの中学校での思い出を懐かしんで、絶対忘れなくて、忘れるものでもなくて、今度開けてくる道が楽しいものであればいいのにと 생각합니다。』

※

といった感想を書いてくる生徒達と共に、さまざまなたくさんの峠を越えて行こうと心に誓った。

3 本 音

「峠」の授業を終えた後しばらくして、私の家庭内で、ふとしたことから結婚の話題が出てきた。その時の内容については、今年の全体学習の指導案に書かせてもらったが、あの時の悔しい思いや腹立たしさは、今でも忘れていない。当時の私は、頭に血がのぼるとすぐ口喧嘩になり、そこから先は、話し合うという状況をつくることができなかった。しかしあれから私は考え、悩み、大いに反省したように思う。対立する意見をもった相手に話をするとき、口喧嘩にしまったのでは分かりあえるものも分かりあえなくなってしまう。これは自分にとって、大いなる損失であり、欠点であると感じた。もっと冷静に、もっと自分をコントロールしながら話さねばと、自身に言い聞かせるようになった。今でも、さまざまな場面で頭に血がのぼることがあるが、自分をコントロールしているつもりである。ただ、そういう自分が、相手に妥協してしまっているのではないかと不安になった時もあった。そう感じる度に、自分の中にある差別解消への熱い思いを確認せずにはいられなかった。

話を蒸し返すようになるが、結婚問題を初めとして本当に今の社会にはおかしいことが多すぎる。そういうことについて、どれだけ目を向けられるかということは、これからの多様化していく社会には本当に重要なことだと思う。自分に関わりがでてきた時だけ問題とするような姿勢では（中には、自分にとって大問題であるにも関わらず、うまくその問題から逃げようとしたり、なるようになれ主義に走っている者もいるが……）、ものの見方が一意的になってしまい、深くその問題に対して突き詰めることができず、闘う対象が何であるかということに気付かないで過ごしてしまうのではなかろうか。そうさせないためにも、様々な場面で様々な人と、本音で語り合える関係や時間が必要であると思う。そうしていくことによって、本当に互いを認め合え、一人一人が尊重される世の中になっていくのではないかと思う。そのためには、今命あるもの全てが、互いの師であるという意識をもつことが必要であると思う。クラスでもそういう関係を築くために、まず本音を出し合うということから出発した。中には、自分の本音が何であるのか、どれであるのか分からない者も、大勢いた。そんな生徒達の本音を次に掲載したいと思う。

（ちなみにこの本音が、我がクラスの全体学習へとつながっていった）

※

『今日の5時間目、みんなの親の話を初めのほう聞いていて、みんなこんなに言いづらい事を言っているのに、なんか僕だけ他人のふりして聞き過ごしていると思うと、なんか辛くなって、その重い重い手を挙げた。いざ立ってみると、みんなの視線がこっちに集まってきて、おじいさ

んを裏切るような気持ちでした。でも、みんなこういう気持ちだったんだろうと思って、言った。言った後でも少し怖かった。みんな、こんな僕をどう思うんだろうかと思ったからだ。父や母、おじいさんおばあさんと、もう少し部落問題についてどう思っているか、近いうちに聞いてみて話し合おうと思った。少しずつ手が挙げれるようになった。この調子で頑張りたい。』

※

『今日の道徳はとても私にとっては苦しい時間でした。涙が出るほど苦しい事を言葉にして、とても辛かったです。他の人もこんなだったのかなぁと思ってしまいます。今日のように言った後とても苦しくなるような事が本音を言うという事なのかと考えてしまいました。私はこれから家で同和問題について話し合っていきたいです。そして、親の考えが少しでも変わるようにしていきたいです。これがまず私達がしなければいけない事だと思います。そして、一人でも立ち向かっていけるそんな人間になりたいです。』

※

『私は今日の道徳の時間、絶対一番仲のいいKYちゃんが発表してくれると思っていました。発表したら、今日は絶対私が応えてあげようって心の中でずっとと思っていました。でもだんだん時間は過ぎていくばかりで発表してくれなくて、チャイムが鳴った時、私は、友達ってこんなもんかって思いました。

その後掃除をしながら、KYちゃんと話しをしていたら、KYちゃんが涙をこらえて、自分の家の人の事を私に言ってくれました。でも、言っているうちに涙が出てきて、私まで涙が出てきて、私もKYちゃんに家の人の事とかを話しました。二人はなかなか涙をこらえることができなくて、涙は溢れてくるばかりでした。その後でKYちゃんが、このこと言ったのは私が初めてだと言っていました。KYちゃんは私に誰にも言えなかった心の中にあるものを言ってくれるような友達とっていてくれたようで、嬉しかった。私はKYちゃんの話聞いて、学校では明るいKYちゃんが家に帰れば苦しい思いをしていると思ったら、今日は発表してくれなかったけど、こんな友達を大切にしていかなければと思った。KYちゃんは、今日私に言った事は誰にも言ってはだめだって言ったけど、私は心の中で、このことを3Fのみんなに言えばたくさんの友達が応えてくれると思う。そうすればKYちゃんも強くなれると思うし、自分のために真剣に考えてくれる子がいると思ったら、これからクラスでも発表しやすくなると思います。私は、友達と家の人の事とかで涙を流して話したのは初めてです。今日私とKYちゃんは昨日よりもすごく友達という絆が深まったと思います。これからKYちゃんだけでなく、一人二人とこんな友達をつくっていきたいです。』

※

5月31日の道徳の時間、自分の本音ということについて取り組んだ次の日の記録ノートである。少しずつ、本音（自分の心の内に秘めてしまい、出したいくないこと）を言うということが、どうしたことなのかが分かってきたのではないかと思います。それと同時に、本当の思いを打ち明けてくれた仲間に対して、自分がどうしていく必要があるのかも分かってきたのではないだろうか。

次に挙げる記録は、その日からの生徒達自身による家庭内での取り組みである。

※

『今日家の人に「部落についてどう思う？」って聞きました。家の人っていうのは、父と母と祖母です。父は見ていたテレビに集中していたのか、わざとか分からないけど、何も言いませんでした。それで、話し合いとまではいかないけど、意見を聞くという感じでした。母は「お母さんはT市からこの家に嫁に来ただけで、やっぱりむこうにも同和っていわれてる所があったなあ。

結婚とかいろいろ難しいんだってねえ。だけど、60才以上ぐらゐの人は昔嫌ってたみたいだけど、今の若い人は気にしてないんじゃない？」と言いました。祖母は今70才を過ぎているんだけど「大阪の方では部落とかそんなこと言う人いなかった。」と言いました。母は「都会より田舎の方が、そういう事はうるさいんじゃない？」と言いました。それでお母さんは「部落の人とか関係なしに、人間はみんな平等だって言ってるのに、何かの税金がいらなかったり、安かったりするの矛盾してる。それが何か気にいらない。」と言っていました。私が部屋からいなくなって部屋の外にいるとき聞いてしまったんだけど「部落の人と結婚するって言ったら、やっぱり気にするわねえ。だけど、恋愛だったらしょうがないか。」と言っているのが聞こえてきました。私は後で、祖母の言った「今はもうみんな平等になってるよ。」という言葉から、『自分以下を求める心』の最後に出てきた『差別はなくなりましたと言わせる社会に差別がある』という文章を思い出しました。今までこの文章の意味がよくつかめなかったけど、何となくこういう事なのかと思いました。今日のは情けないけど、話し合いじゃなくて、聞くだけでした。今度の機会には、ちゃんと1対1で話し合ってみようと思います。』

※

『今日の夕方、母と同和問題について話し合った。話しを出す前「真剣に話してくれるだろうか」と、不安でいっぱいだった。けど、私一人差別から逃げ出しはいけないと思い、思いきって話し出してみた。同和学习について母に聞くと、母は一瞬驚いた様子を見せたが、真剣に話してくれた。今まで聞いた事のなかった母の本心を聞いた。母はこう言った。「あんまり部落っていうのは分からないけど、同和問題学習をするのはいい事と思う。私は、親から部落っていうことを聞いた事がなかったし、親がとても他人の事をとやかく言うのが嫌いだったから、中学生くらいになって、初めて部落っていうのを知ったのよ。初めて知ったとき、おかしいと思った。こんな差別はしてはいけないと思うよ。」それを聞いて私は「もし、私が部落の人と結婚するって言ったらどうする？」と言ってみた。母は困ったような感じだった。母は「Kが決めたんなら賛成したいけど、親戚付き合っているのがあるから、それはその時になってみないと分からない。」と言った。私は、差別してはいけないって言った母も、こう言った母も、本心を言ったに違いないと思った。どうしてそんなこと分かるのかって思うかもしれないけど、母はこの話を持ち出してから、私から目をそらさずに正面を向いて言ってくれたから、私は、母は本当に思っている事を言ってくれたと思う。こんな事をいろいろ話した。「社会にある差別」ということについて。私の知らない事を母はいろいろ話してくれた。「差別をしてはいけない」とか、「差別をなくそう」と言っている町が差別している。」と、そのことについていろいろ話してもらった。母はこのことを話しているとき、怒っている口調で、私に話してくれた。何度も何度も同じ事を繰り返していた。そんな母を見て、私は凄く嬉しいような思いが湧いてきた。今まで同和問題について話し合った事はなかったが、真剣に話してくれる母を見て、話をしてみて良かったと思う。知らなかった母を見たような気がする。まだ母も「差別しているところはあると思う。」と言った。でも母は「部落の人を差別する事は悪い事だから、これからいろいろ頑張って話し合いたいと思う。私の時も、こんな同和学习っていうのがあったら、変わってたかもねえ。」と言った。私はこれからもいろいろ話し合いたいと思う。今まで知らなかった母も見れたし、自分もがんばらなって本当に思った。こんな変なこと早くなくしたいって本当に思った。だから苦しくても、苦しい事から逃げずにしたい。そうしたら、今日みたいになんか今までとは違うようになると思う。母と同和問題について話し合って良かったと思う。』

※

『今日夕食が終わると、家族で同和問題について話し合った。いつもはこんな事はしないんだが、父が話を出してきた。この前母とは話し合ったが、父とは話し合っていない。だから今日初めて父の話を聞いた。母の時と同じように質問してみた。同和問題についてまず私が話をして、父に聞いた。父は「同和学习をするのはいいと思う。だけど、だいぶ変わったなあ。」と父が昔の事を話してくれた。父は板野町で生まれたから、いろいろ現実にあった事を知っている。そのことをたくさん聞いた。その中で、結婚の事が出てきた。「私がもし部落の人と結婚するって言ったらどうする？」と聞いてみると、父は「部落の人を差別するっていうのはいけない。でも結婚となとなあ。」と父は言った。父は実際にあった出来事を話してくれた。その内容はこんな事である。「あるAさんがいたんだけど、部落の人と結婚した。両親も賛成したけど、兄弟が嫌がって家を追い出され、親戚も付き合っていない。」という内容のもので、「もし私がそのA子さんだったら？」と父に聞くと「お父さんは賛成したいけど、親戚に迷惑がかかるから、その時は親子の縁を切る。」と言った。そして母が考えてこんなことを言った。「Kが部落の人と結婚した時のことを考えてごらん。子どもは凄く辛い思いをしなければいけないのよ。」これを聞いたとき、私は考えてしまった。その子は幸せになれるのか？私は辛い思いををすると思うけど、負けないで生きていけたらと思う。周りで支えて頑張っていけたら大丈夫だとそう思った。

私は今日家族で話し合いをする中で、いろいろ知った。今まで知らなかった昔のこと。また現実にあった事など、たくさん知った。あまり同和問題について家族で話し合ったことはなく、初めて父の部落に対する意見を聞いた。ここには父のことしか書いてないが、母とも話し合い、二人の知らなかった部分を知った気がする。父も母も部落を差別するのはいけないと分かっている。でも周りの人達の目を気にしてしまって、負けてしまっているのだ。父も同じようなことは言った。私はこれから同和問題について話し合っていきたい。でも、周りの人達も話し合っほしいと思う。今まで家族で同和問題の事について話すということは、とても不安で、苦しくて、逃げてしまいたいと思うものであった。しかし今はそうは思わない。なぜか、もっともっとたくさん話し合いたいという気持ちの方が強いと思う。これも、父と母の本音を聞いたからである。なんと言ったらいいいのか分からないけど、とても嬉しい気持ちがしている。私はまだ家族で話し合わなければならないことがある。親戚の事についてだ。このことについて、しっかり話し合いたいと思う。

父と母に、全体学習の時に、話し合ったことを皆の前で話してもいいかと聞いた。父と母は困って首を縦にふってはくれなかった。だから私は、いろいろ学校で取り組んでいることを話してみた。そうすると母が「話してもいいよ」と言ってくれた。母は「絆を読んだり、プリント見て、皆が取り組んでるのは知ってるから、私達だけ取り組まないっていうのもな。」と言った。しかし、父はまだ首を縦にふってはくれなかった。だから、一生懸命話した。そしたら、ようやく分かってくれた。私はこれを話してもいいのだろうか悩んでいた。でも父と母が「言っていていい」と言ってくれたので良かったと思う。母は初め、15日は「来れないと思う」って言っていたけど、今日は「行けたらちよっとでも見に行くからね」と言ってくれた。少しずつ家族が変わってきたように思う。』

※

私は思う。他のことならずっと話題にできるのに、部落差別、同和問題学習のこととなったら、どうして会話がしにくい、成立しない、できないのだろうか？そうさせている社会自体に「植え

付けていく差別」体制が存在しているように思う。そのしがらみの中で、みんなが互いを苦しみ、またそのことが逆に自分自身を苦しめているということに気付かねばならないと思う。そんなものから解放されるならば、そこにはなんと素晴らしい社会ができていくだろうか。そういうことに今のうちから真剣に取り組み、頭を練っていくことが大切であると思う。頭の軟らかいうちに、真実を見つめていく習慣を、鋭く見つめる眼を、養っていく必要があると思う。

次に挙げる記録は、この1週間の取り組みを受けての、6月7日の道徳の時間の感想である。

※

『今日意見発表の前に、KMちゃんにがんばってと声をかけた。KMちゃんは本当に頑張ったと思う。帰ってきてから学活を始めた。その時KMちゃんについて何人かの人が言った。私も頭の中に、ああ思う、こう思うといっぱい出てきたけど、言えなかった。KMちゃんをひとりにした。KMちゃんが一番望んでいたのは、一人にしないでほしいということだと思う。私も一人にしたいいけないといつも思う。続けてあげなければと、いつもいつも思う。あんなにKMちゃん必死になって同和問題に取り組んでいるのに、私は何してるんだらうって。その時KMちゃんの方見たら悲しそうにうつむいていた。なんか私も辛かった。私よりもKMちゃんの方が辛いだろうと思う。KMちゃんの辛さは、発表しない私には分からない。なんかKMちゃんにごめんと言いたい。KMちゃんは一人苦しんでいる。助けてあげたいと思った。でも私はいつも思う。誰も発表しないからいいかって……。『逃げてるな』って自分自身痛いほど分かっている。先生やKMちゃんにとったら何にも分かってくれてないと思うかもしれないけど、私は分かっています。分かるんです。KMちゃんに嫌われてもしかたないと思う。今の私は……。変わりたい。変わりたい。心の中はその言葉でいっぱい。もっと勇気がほしい。今の私は、目も腐り、心も腐っている。KMちゃんみたいに輝きがほしい。腐ったまま大人になりたくない。卒業したくない。このクラスと分かれたくない。私が輝けば、このクラスはきっと先生の理想のクラスになると思う。みんながみんなこの思いを持てば、絶対先生が思っているクラスになれるよ。絶対に。今度KMちゃんを一人にしたら、私は腐ったままになるような気がする。なおらないような気がする。先生、私は頑張る。できるだけ頑張る。今度という今度は本当に頑張る。このクラスをつぶしたくない。腐らせたくない。精一杯頑張ります。』

※

『先生がくれたプリントの中に、私の文章があった。そのことについては作文に書いたけど、恐い。つなげてくれた人達、私を支えてくれる人達には申し訳ないけど、恐い。その子に言葉を言われた時「恐い、助けて！」って言葉が喉の奥までこみ上げていた。他の人達が聞いたら、たわいのないことかもしれないけど、書く事だけでもむちゃくちゃ勇気がいって、それをプリントの中に見つけたとき、正直言って嫌だった。先生には悪いけど、そう思った。自分が、自分自身が言うことができるとき、本当に手を挙げて言いたかった。自分自身で口に出して言わなきゃって、みんなに伝えなきゃって……。一生懸命に勇気振り絞って、前を向いてみんなに訴えなきゃ、私は自分の足で、自分の意志で一步を踏み出せないと思う。背中を押されて一步を踏み出したとしても、きっと何かでつまずいたとき、今の場所に戻らなうと思う。でも、言える勇気が今はない。ずっと前の時、後に続いてくれなかったことがあった。教室がシンッと静まりかえっていた。前を向いていた顔が下がってきた。もう一度発表しようかどうか迷った。もしかしたら、続いてくれるかもとも思った。でもできなかった。先生が怒っていたのも分かった。その後、授業が終わっても、心の中が寒かった。いくら自分を励ましても寒かった。その日は人と話すのが嫌だった。そ

の次の授業の時、KMちゃんが「一人にしたい」と言ってくれた。その時まで、その場でいるのが嫌で嫌でたまらなかった。でもKMちゃんの言葉を聞いたとき、それまで寒かった心に、フワッであたたかい風が吹いた。それはKMちゃんのあたたかさだと私は思う。それでまた、自然と手が拳がった。私もKMちゃんを一人にしたいって思った。だから、恐いけど、発表するのは恐いけど、頑張ろうって思う。KMちゃんとその後が続いてくれた人を裏切るわけにはいかない。先生も自分のことを、本音話をしてくれる。だから裏切るわけにはいかない。母は来てくれる。でもほんの1分か2分かもしれない。でも私が、「1分か2分、1秒でもいいから来て。」と言ったら「うん。」って言ってくれた。嬉しかった。だから、もっと頑張ろうと思う。おねえちゃんも話をしているうちに分かってくれていた。

言葉は人をよく傷つけるけど、
沈黙ほど胸をえぐるような思いにさせるものはありませんね、先生。』

※

常にクラスの進行をリードしてくれた一人の女の子が、やはりこの時発表をしてくれた。しかしそれになかなか応えられない雰囲気、クラスの中にはあった。だがその姿は、さなぎが時間をかけてもがきながら脱皮していこうとする過程であり、脱皮の早さにも個人差はあると感じさせてくれた時間であったように思う。しかし、最後の二行にはまいった。本当にまいった。確かにその通りである。勇気とかいうなまやさしいものでないくらいの思いをもって発表したにも関わらず応えてくれなかった時というのは、それから後ずっと、生殺しにされていくくらいの残酷さがあると思う。しかしながらそういう思いがあるからこそ、かえって人の温かみを感じれるのかもしれない。そしてそれが真の勇気や、真の力強さとなっていく。そう信じて疑わない。

そんな揺れる思いの中、ある一人の生徒が、こんな事を記録ノートに書いてきた。

※

『私はちょっと不思議に思う事があります。それは、いつも全体学習の時学習プリントっていうやつをして、その通り授業が進んで行くっていうことです。それに、発表もプリントに書いてある事を見て言っているし、それがとても不思議です。授業っていうのはそんなもんじゃなくて、先生が言った事について、考えた事や思った事を言うものだと思うからです。書いてある事を言っているんじゃ自分の思いなんて通じないと思うんだけど……。これが今私が思っている事です。だから、3Fがする時は、プリントなんて作らずに、たとえ作ったとしても、その通りにするというののない、自分の思った通りに言葉にして意見を言うそんな時間にしたいです。』

※

6月15日の全体学習の構想を練る中で、ちょうどこの記録ノートと同じ事を考えていた時の事であった。これで私も踏ん切りがついた。そうしたいと思いつつも「能力の差があるから、みんながみんなそれで発表できるはずがないんだから、やはり学習プリントを持つてのぞもうか……」とついつい生徒達を温室の中にはめてしまっていた。しかし、人が見ていることさえ気にしなければ、いつもの会話のように進めていけばいいだけで、会話が難しければジェスチャーで訴えればいいのである。元々日頃の会話ができていたのだから、発表できないということの方がおかしいのだ。そう考えることにし、当日の授業は学習プリント無しという状態でのぞむこととなった。

3年F組全体学習の感想を綴った記録ノートの一部抜粋である。

※

『今日の全体学習が終わったとき、なんか嬉しかった。それは自分が発表できたことかもしれないけど、他の学校の先生の気持ちとか、保護者の気持ちが聞けたことだと思います。他の学校の先生の気持ちってなかなか聞けるものではないからです。本当に今日の全体学習やって良かったって思っています。自分でも凄く満足しています。けどこれからがスタートで、卒業までにどれだけできるかだと思います。それともう一つ思ったんだけど、クラスがなんかまとまってきたって思います。クラスがまとまるってことは、一人ひとりのことを尊重し合えるようになるっていうことだと思います。それができて私は凄く嬉しいです。それとこれは私だけかもしれないけど、教室で発表するよりも、私は全体学習で発表する方が緊張しなくてすみました。短いけど、今私と思うことです。これを境に頑張ります。』

※

『今までの授業の中で、私は真剣でないときに、5月の後半あたりにあった。その証拠に、記録ノートを開こうとしなかった。書いても一緒だ、どうせ書くだけでは先生は信用してくれないんだから、いつそ書かない方がましだって、そんなふうにひねくれて考えたりした。道徳の時間とか、発表もしたくないとか思って、しれ一つとしていて、私自身、発表しにくい空気を作っていた人間だったと、今本当に反省している。授業の中でときどき泣きそうになる先生の顔も知っていたのに、それに応えようとしなかった。今日も先生は最後の方で泣きそうだった。けれど今日は、いつもとは少し違う涙だと思う。それはみんな分かっていると思う。今を境に、クラスの空気ももっと軽くなると思う。』

※

『今日の全体学習は、本当に満足できる全体学習でした。始まる前は、凄くドキドキして、胸が高鳴っていました。1回発表すると、ドキドキもなくなりました。仲間が続いてくれたからだと思います。それで、家でちょっと今日のことについて言ってみました。「部落差別についてどう思うか？」と聞くと、他の人に聞きな、みたいなのを言われました。それでも聞くと「昔は部落の人はかたまってたのに、今はその場所にいたらなにか言われるから、違う地域に逃げて来てるんだぞ。昔はこの地域には部落の人なんかいなかったのに、今は部落の人が来てるからなあ。」と言われました。なぜ、部落の人と同じ土地に住みたくないうることを言うんだろうと思いました。逃げて来ているのではなく、家の都合かもしれないのに、お母さんとか近所の人達の噂話には腹がたちます。そして「最近建った近くの家の中の1件は、部落の人なんだって。昔の人達に聞けば、名前だけで、もう部落の人かどうか分かるらしいなあ。」とも言われました。腹がたって、お母さんに答える言葉が見つかりませんでした。ただ「部落差別はなくなければいけない。」と言いました。返事は帰ってきませんでした。母は差別者です。学校で部落差別の映画を見た話をしても「そんなの関係ないのになあ。」とか言うし、ため息が出ます。そんな差別者がこんなにも近くにいるとは思いませんでした。お母さんにも教えていきたい。自分の差別心に気付いてほしい。だからまた話し合いたい。』

※

『今日は、今年一番の暑さだった。蒸し暑さに、みんなの熱い熱い思いが加わり、砂漠にいるみたいだった。何日も前から、先生は、今日の授業のことを「今までの授業を覆すような……」とか、「とんでもないことをする……」と言っていた。私は正直言って、そんなにプレッシャーか

けられても、絶対できないと思っていた。でも、体育館に入って、机に座っても、大勢の人が体育館に入ってきて、緊張だけはしなかった。これからどんな一時間が繰り広げられるんだろうとワクワクした。それは「絶対できない」と思っていたけど、どこかで3Fのみんなを信頼していて、恐らくやってくれるだろうと思っていたからだと思う。周りを見れば、ビデオが9台、ラジカセが2台まわっていた。どこを見ても、人、人、人で、みんなの目が私達を見ている。もうどこへも逃げ出せないと思ったら、今ここでやるしかないと思った。1年や見に来てくれた人の中には、全体学習を初めて体験する人がいると思う。だから、その初めて見る全体学習がどんなものであるかによって、その子の同和教育に対する見方っていうのが変わってくると思ったから、これから差別がなくなるかどうかは、私達にかかっていると思った。でも授業が始まったときは、手が重く、なかなか挙がらなかった。で、「よし、挙げよう」と思ってパッと挙げたら、後にどんどんみんなの手が挙がって行って、本当に嬉しかった。続いていくことの喜びも本当に分かった。私は涙もろいのか分からないけど、いつも、人が泣いているのを見たら、涙ぐんでしまう。KGさんや、TMさんや、MUさんや、AYさんが泣きながら言ってくれたとき、どんどん涙がたまってきた。今まで映画とかを見ても、どうにか我慢できたのに、あの時は上を向いたりしてこらえようと思ったけど、いつのまにか涙が頬に落ちてしまった。「なんで私が泣かなければいけないの」と何度も思った。差別なんかのために涙なんか流したくなかったのに……。でもこれは、山川の人が言ってくれたように、涙ながらに言ってくれた人に感動する涙だったと思う。それで、しばらくしてHNくんが「お母さんにお願ひがあります」ときりだして、「今まで自分を育ててくれた親を売っているんですよ。息子達に苦しい思いをさせたくないから来てるんでしょ。自分の経験とか話してあげてください。」と言ったとき、またなんか嬉しくて、感動して、涙がポロッと出た。HNくんとは、小6の時も、中1の時も同じクラスだったけど、こんなに強い人間だったかなあと思った。私が知っているHNくんっていうのは、いつもおもしろい人っていう感じだったから、1年たってまた同じクラスになって、こんなにも変わったのを見て驚いた。本当に強く変わったんだなあということにも感動した涙だったと思う。それで先輩達が「全体学習を続けていってほしい」という願いをもって卒業したけど、私達にそれができるかどうか不安だった。でも徳商の先生とか、卒業生とかが言ってくれたことで「私達はこの炎を絶やさずにいけるんだ」と確信ができ、自信がついた。私の小6の時の担任の先生がきていた。けど今日の授業は、担任の先生だった人だけじゃなくて、日本中の人にも見てもらいたい授業だったと思う。この、「何が起こるか分からない体育館」で、これからもずっとみんなと共に学習していこうと思う。』

※

『今日の全体学習は、自信を持って、満足できる学習ができたということが言えます。私は昨日なかなか寝れなくて、部落差別に対していろんなことを考えたり、先生の資料を読んだりしました。そして私は寝る前に“絶対明日は満足できる学習ができる。”と何回も自分自身に言って寝ました。私は横になってからも、心の中で“絶対できる。3Fの子だったら絶対できる。”と言い続けていたと思います。学校に行くと、時間は過ぎていくばかりで、あっという間に5・6時間目がきていて、5時間目が始まりました。部落差別をいつ、どこで、誰から教わったかということと授業が始まって、私はそのことを昨日家にかえって考えたんだけど、考えて出てきたものは、差別を教えたのは小学校の先生だったと思っていたけど、そうではありませんでした。それより前に、私は家の人に教えられていたのです。習慣のように“あの子とは遊んではダメ”という言葉聞かされ、今になってそれが部落差別ということが分かりました。今思えば、習慣のよ

うに家の人の差別心を聞かされ、それに逆らうことができず、言われたとおりにやってた自分が情けないです。

私は今日の5時間目で、自分の思っていたことを全部言えました。言うときはそんなに緊張しなかったけど、苦しかったです。言ったことに対して何人もの子が続いてくれて、苦しいけど言って良かったって思っています。今発表している子も、凄く苦しい思いをして発表しているんだなと思って、仲間の意見を聞いていました。最後の方になるにつれて発表する人が多くなってきて、私はそのとき“また仲間が増えた”という喜びでいっぱいでした。自分では5時間目が凄く短く感じました。友達も発表できて嬉しそうだったし、私も発表してくれて嬉しかった。

6時間目の全体授業では「部落」というのはどこにあるのだろうかということで、昨日学習会に行っていた友達が発表した。私が毎回のように思うことは、一人にしていけない、応えなくてはならない、ということです。いつのまにか手を挙げて発表していた。その後、昨日の学習会に来ていたたくさんの子が続いてくれて、昨日学習会があつて良かったなと思いました。学習会に来ていなかった子とかはあまり分らなかったかもしれないけど、それでも発表してくれる子もいた。そんなことをしていくことによって仲間が増えていくのではないかなと思った。TMさんが2回目発表してくれたとき、私も涙が出そうになった。私も昨日学習会で先生が手紙を読んでくれたときに、どうして部落問題学習と国語と一緒にされなければならないのと思って腹がたちました。その先生って一体何考えてるの？って思いました。その先生が同和問題学習について語っても、私は“何えらそんなこと言ってるの。全然分かってないのに。”って思う。そんな先生に、私は部落について作文を書けと言われても、絶対本音は書きません。私は、そんな人間に私の本音なんか伝える必要はないと思います。そんな人が身近にいる。腹がたつというか、つらいです。部落についての作文が成績になるのは、絶対おかしい。どうして自分の心の中にあるものが成績にならなければいけないのか？私も高校に行ったら、こんな現実に出会うかもしれません。でもその人に、それは絶対おかしいって、一人の人間として言えるだろうか？今日も何人かの先輩が発表してくれて、高校に行ったら中学校みたいに同和問題学習をしないで、ほとんどの子が高校に行つて崩れていっているというのを聞いて、私もそんなふうになるのかなって思った。でも、高校に行つても、社会に出て行つても、絶対に負けたくないです。それは、今までの全体学習を無駄にしたくないからです。特に今日の全体学習は絶対忘れないと思う。だから高校に行つても闘いたいです。今日の5時間目は、たくさんの子が苦しいことを、勇気を出して言ってくれて、これからもこんな仲間を大事にしていこうと、一人ひとりに教えられました。6時間目が終わってから、先生が一人ずつ握手をして、私は先生と握手をしたときに“今日はいいい学習ができた。先生、これからも私の仲間の一人として頑張ろう。”って心の中で言っていました。こんな気持ちを大切にしたいと思います。今日家に帰ってきて、記録ノートに書いてくれた先生の返事を読みました。いつもの何倍も、何十倍も私に勇気を与えてくれました。私は読んだときに、今日自分の中にあるものを全部言えて良かったと思いました。

私は6月15日という忘れることのない日を心に残して、これからも頑張っていこうと思います。自分の思いを全部語って、授業が終わってからの先生との握手、記録ノートで先生が凄い勇気を与えてくれたこの6月15日を、私は忘れることなく心の中に、体に、焼き付けていきます。』

※

私は、この授業をするにあたって、しばらくの間「自分も部落に生まれてくれば良かったのに……」と思ったことがあった。しばらくの間となってしまったのは、そう考えることも、差別な

んではないだろうか気付いたからだ。私はこの問題から逃げたくはないのだが、疲れた時にどこかでひと休みしようとする自分を知っている。そこから道を外れてどこかへ逃げてしまうのではなかろうかと思うと、恐いのである。だから、逃げられないように、一生この問題に関わっていられるようにと、そういう思いを抱いたのである。しかし、ではもし自分が部落の人間であれば逃げられないかという、そうでもないのである。部落からは逃げられないが、部落を隠したり、部落から顔を背けたりはできる。そう考えると、この問題を考えるときに、部落であるとかないとかいうことは関係ないのである。そう思えるようになった。

それと、上の話をある人にした時に「同和教育に力を入れてたら、そのうちに、部落の人と思われるから程々にしときなよって言われるだろう。」と言われた。なるほど、その通りであった。今ではもう何も言わないが、一時この同和教育に力を入れることを親に否定されたことがあった。それだけ、世間に白い目で見られたくないという思いが強いのだろうが、そう思わせているのは実は自分自身であり、自分の中にある幻影におびえて生きているのである。自分が理想としているもの以下の存在になってしまうかもしれないということに恐怖しているのである。確かに人類という生物は、そういう状況のもとで進歩してきた面もあると思う。しかしそういう状況で生きていくということは、大変しんどい思いをするということだと思う。手を伸ばしても伸ばしても掴むことのできない理想を、焦った気持ちの中で追い続けているのだから。焦っている理由は、後ろが常に崖つおちだからだ。少しでも休んでいると、崖は後ろから迫ってきて、その後は想像もつかない真っ暗闇の奈落の底に落ち入ってしまう。常に後ろを気にしながら走り続けねばならない。それはまるで、芥川竜之介の「蜘蛛の糸」のようである。しかし彼らは知らない。実はその崖が、自分の心の中にある幻影を投影したものであるということを……。

※

この授業を通して、また一つ自分が叱咤された気がした。今年も全体学習に自分の親をよんだ。父は昼から休みをとって見に来た。どういう思いを抱いたのかは分からないが、とにかく見に来て最後までいた。最近では様々な同和教育の本を広げて読んでいるようで、たまに私に本やパンフレットを提供してくれる。家庭ではこの問題について、会話し合い会話はない。しかし私の日頃からの取り組みを見て、何かを感じているようではある。

親戚の年輩の者達が他界する度に、私は思う。「安らかに、おおらかに、解放されて他界していったらどうか……？」私はそう思える生き方をしていきたい。他人のことをとやかく言って、自分の価値観に周囲の者も押し込めて、目に見えぬ幻影にがんじがらめになったまま、俗世間の垢にまみれたまま他界したくはない。そんな生き方を私の両親にも、周囲の者にもしてほしい。微力ではあるが、同和教育に、自分の生きる方向を見いだせるように、情熱のある私に育ててくれた両親に感謝するとともに、今度は私が両親に対して、よりよい生き方を掴んでいけるような働きかけを私はしていこうと自らの心に誓う。またより多くの者に、そんな生き方を掴んでほしい。この全体学習の熱い思いを抱いたまま、7月に四国同和教育研究大会のため、松山へ足を運んだ。分科会で、その時の取り組みや自分の考えを、要点を得なかったかもしれないが、生徒と同じように挙手して発表させてもらった。今までに、県単位の会には出席して発表もさせてもらったが、四国大会以上の場では初めてであった。しかし私には、守るべき仲間がある。貫くべき信念がある。だから自分の意志で発表した。その日の分科会の後、全然知らない同志の人達が私の元へ歩み寄って来てくれた。「感動しました。」「いろんな資料を是非とも紹介して下さい。」「峠を越えてを送って下さい。」私自身が感動した。「こんなにも共感し、応えてくれ

る仲間がいるのか」と。一段と勇気が湧いたきた。私の勇気は、私のクラスの生徒達の勇気や、周囲の者達の勇気へとつながっていくように思う。そんな思いにさせてくれたその時の仲間達に、心からの感謝を込めて、以下の手紙を送らせていただいた。

※

謹 啓

土用に入りましてから、いよいよ炎暑耐えがたい日が続いておりますがいかがお過ごしでしょうか。先生には益々ご清栄のこととお喜び申し上げます。先日松山にてお会いできましてから、ずいぶんと日にちも経ってしまい、たいへん失礼を致しました。

さて、四国同和問題研究大会の折にお話しいただきました「峠を越えてpartⅢ」を、今ここに送らせて頂きます。丁度私がこの全体学習に出会いましたのは、始めて2年目でありました。その時の感動は、私の今までの同和教育や、中学校教育を根底から覆すようなものでありました。それまでの教員生活（といってもわずか3年でしたが）の中で築き上げてきた教員としてのプライドが傲慢さとなっていた自分を恥じました。そんな自分を励まし、立ち上がらせてくれたのは、この問題に自らの身を削っているかのごとく真剣に闘っている教員仲間であり、生徒たちでした。そんな偉大なる仲間たちに感謝しながら、自らの生き方を問い続けるために今を輝かせていたいと思っております。

先日私たちの仲間の教員に一般の方からお電話をいただきました。話の内容は、《知人の子供が登校拒否になっていて、悩んでいる。「峠を越えて」の中に登校拒否になった子供の発言があるので、ぜひとも読ませてあげたいと思うので、一冊いただけないか》といった内容であったそうです。当時私のクラスの生徒でありました。本人、私、クラス全員、学年全体が揺れました。その時の内容は、残念ながらあまり記すことができていません。私の仕事不足だと反省している次第ですが、その少ない文章でも人を導くことができているのかと思うと、たまらない喜びがこみ上げてきます。その事を早速当の本人に伝えと、受話器の向こうで涙をすすりながら喜んでおりました。本物の人が、人を変え、磨いていくんですね。

今年度も全体学習を通して同和問題学習を展開しておりますが、昨年度が個々の悩みやいじめを対象にしたのに対し、本年度は学習会が生徒たちの話題となっております。昨年とはまた違った取り組みができているようで、たいへん勉強になっております。この取り組みは、「峠を越えて」としてまとめたいと思っております。

長々と記してまいりましたが、この暑さ厳しい折、御自愛なされますようお願いし、またお目にかかれまことを深く願っております。

乱文ながら書中にて厚く御礼申し上げます。

再拝

7月21日

徳島県板野郡板野町板野中学校 吉成正士

5 「ゴンタこそが闘いを」に寄せて

『お弁当のことができて、私も遠足の時ぐらいいしかお弁当を持って行かないけど、友達に見られるのが嫌だと思ふ時がほとんどです。せつかく母が作ってくれたのについて思うけど、周りの目を気にしてしまいます。そういうところが私のドロドロしたところだと思います。周りを見ると、必ず一人は手作りのお弁当でない子がいます。そんなのを見ると同情してしまうし、私は手作り

なのに、文句ばかりいって、我がままで、ぜいたくだと思いました。だから母に文句を言う度に“文句ばかり言うもんじゃない。作ってほしかつても、作られない家庭もあるんだから”って母によく叱られます。本当にそうだと思います。作ってくれるから文句が言えるんだと思います。作ってくれる人がいなかったら、文句が言えるものではないような気がします。音野さんは、母に悪いと思いながらも、周りの友達のお弁当を見ていると辛いし、恥ずかしいという気持ちがあって、お弁当を捨てたりしたんだと思います。自分の家の生活の状況を考えると、絶対捨てることはできないと思うけど、周りの子がおいしそうなお弁当を食べていて、自分のお弁当の中身がご飯だけだったら、情けないというか、自分の家がどんなのかっていうことが分かってしまうから、あんな行動をしてしまったんだと思います。』

※

こういう職業につくと、当然のごとく遠足に行く。私は遠足に行く度、子供達の弁当を見て回る。つまみに回っているとも言われるかもしれないが……。 (周りの者には卑しいとか、はしたないとか言われるが) その度にいろんな思いにかられる。

お弁当にはその子の家庭が出てくる。30名も越えた人数を見ていると、当然のごとくいろんな家庭があるものである。大きなお弁当があれば、小さなお弁当もある。手の込んだお弁当もある。家の人に作ってもらったお弁当もあるかと思えば、家の人の仕事の関係や父子家庭でお弁当を作ってもらえず、お弁当屋さんで買って来た子もいれば、パンを買って来ている子もいる。自分で作ってきている子もいる。教師は、そういう状況をまず知らねばならないと思う。互いが理解し合う中で、堂々と仲間達と一緒に食べている子はいいが、もうつつ向いて食べていたり、いつものグループでない子達と食べていたり、表情を変えて食べたりしていれば、その子の心情を細かく掴んでいく必要があると思う。自分のことを、自分の家族を、自分の境遇を卑下しているならば、そこには必ず同和教育が必要である。またそんな子達が堂々と胸を張り、キッと顔を上げられるように、その子を認めていける仲間集団を作っていかなければならないと思う。この春の遠足で、やはりお弁当巡りをしたが、その時ある子が焼きおにぎりを1個ニコニコしながらくれた。この焼きおにぎりのおいしかったこと。自分で作ってきたお弁当の数少ない焼きおにぎりである。出来映えも素晴らしかったが、それ以上のおいしさを感じたのは確かだと思う。他にもお弁当を通じていろんな家庭をかいまみたが、そんな状況を通じてその奥にあるものをしっかりと見据えなければならぬと強く思う。

※

『私が小学校6年生の時の話ですが、その先生はひいきがすごいいひい先生でした。この前、KMちゃんからその先生の話が出てきて、いろいろ話してたんだけど、私はそれから腹立たしい気持ちになりました。KMちゃんがその先生の話してなかったら、私はその先生の事は忘れていました。

6年生のある日、研究授業をしたんです。その時、発表する順番ていうか、1番この子が言っ
て、次にこの子が言っ
て、最後はこの子にしようとか、いっぱい言った子は、自主勉強の宿題がなくなるとか、嘸泣きでもいいから泣けとか言ってたんです。その時は私は、“まちがってる”とか思わなかった。まだ自分の中に意識がなかったから……。でも、絶対それはまちがってると思います。私が今一番腹たってる事は、“嘸泣きでもいいから泣け”っていう言葉です。そして研究授業の最後の方に大体みんな泣いたんだけど、どうしてあの時みんな泣いたんだらうって思っ
た。先生も泣いてた。でもその涙は信じれないような気がする。だって、見に来ていた先生が帰

ると“何回発表した～？”ってみんなに聞くんだもん！普通聞かないよね。感動してる時にそんな事……。私の6年生の時の生活って一体何だったんだろうって思います。KMちゃんも私と同じ事思っていると思います。6年生の時の私達は、先生からみたらただの人形だったと思う。何でも言ったら聞いてくれる。そういう考えだったと思う。私達は毎日先生の顔色ばかりうかがっていました。そんな自分が、どうして“いや”って思わなかったんだろうって思います。今その先生がどこにいるか分からないけど、会ってまちがってるといことを言いたいです。本心は会いたくない。でもこのままほっておけば、差別者は増えていく。誰かが言わなければ、先生は自分の言ってる事、してる事はまちがってるとは思わないはずです。そんなのはいやす。差別者をほっておくっていうことは“見て見ぬふりをする”という事と同じだと思います。』

※

過去のように言われているかもしれない授業。しかし本当に今はこんな授業がなくなってしまうのだろうか？みんなが本当の思いを語っていくような研究授業や、日頃の授業となっているのだろうか？やっているように見えて、真実をごまかしながらか行われてはいないだろうか？陰で苦しい思いを抱いているような子はいないだろうか？次の回の最後の全体学習になってようやく一歩解放された子もいるが、何かのしがらみを感じながら生きている子達が、やはりたくさんいる。しかし実はそれは、子ども達だけではない。教師を含む大人もまたしがらみを感じながら苦しい思いをしているように思う。子ども達をそんな大人のコピーにしてしまわないように、大人達の方が先頭に立って、自分の今の本当の思いや、苦しいものを出していかなければならないと思う。それなしに出てきた子どもの本音は、その時だけの教師と子どもの互いの自己満足になっているのではないだろうか？もっと先に進んで行けるはずだ。連帯していけるはずだ。教師が本音で応えてさえいれば！！人は変わる。悪いようにも良いようにも変わる。明らかに変容していった子が何人もいる。見違えるように変わっていった。そんな子の記録ノートを下に載せる。なおこの子の卒業を前にした記録ノートを最後の章に再び紹介することにする。

※

『6時間目の初めのほう、HDさんが「全体学習がしんどい」と言っているのを聞いたと言っていました。正直言って私もそうでした。全体学習がくる度、しゃべったり、眠なくなったり、凄くしんどかった。それとか延長したときとか、長くしゃべったりしている人に“はやくしてー”とか心の中で思っていました。今は眠たくもないし、しゃべったりもしません。発表する人の言葉もちゃんと聞いています。去年では考えられないほど気持ちが変わりました。クラスで授業している時、私は発表してなかったけど、チャイムが鳴り終わって延長している時に、いつもHN君が心に熱いものがくるようなことを言います。その言葉で手が震え、心臓が高鳴ります。発表しよう、といつもそれで決心するんだけど、声にしよと思うと、声が震えそうで、心臓が落ち着くまで待とうとすると、授業が終わってしまいます。いつもその繰り返しでした。その授業が終わった後の掃除の時間は、いつもズシンと重いものを背負ったようで、瞬きも忘れそうでした。そして先生が、今度の時間に続けると言って“よし、今度こそは”と思っていると、気持ちが冷めて、授業の最後になるまで、気持ちが熱くなれず、意見が言えません。いつも苦しいまま終わってしまいます。これは、まだ本当に部落差別を無くそうと思っていないからなののでしょうか。すぐ冷めてしまう気持ちもその証拠ですか。いつも悩んでしまいます。本当に目覚めていないのではないのか？と……。もしそうだったら、このままでは高校に入れば、ますます冷めてしまいそうで、自分が恐いです。冷めないように、いつも考えとかなければいけないと思います。』

※

人間にはそれぞれに発達段階があると思う。また、それぞれに応じた表現方法もあると思う。それを否定はしないし、むしろ肯定する。中には発表がまだできない子もいる。それはそれで認められねばならない。その子に応じた表現方法を提供するのもまた、教師の役目であると思う。ある子（人）は絵に描くかもしれない。ある子（人）は詩にするかもしれない。ある子（人）は音楽にするかもしれない。しかし全てに共通することは、必ず自分の思いや願いを持たねばならないということである。そしてそれを何らかの方法を通じて周りに伝えなければならないということである。それができなければ、本当に悪い意味での個人主義になってしまうように思う。それでは残念ながら、互いを理解することもできないし、尊重することもできない。尊重し認め合えてこそともに手を取り合えるんだと思う。あまえてはいけぬ。そこから脱皮せねばならない。下にあげる子も、悩みながらこの1年を過ごした。悩み揺れ動いたことを自分自身の基盤において、これからも頑張っていくであろうことを信じて遠くから見守っていきたい。

※

『私は昨日も今日も公の場で発表できませんでした。できなかったというのか、しなかったというのか、よくわかりません。特に今日、全体学習の場でF組の子が次々に発表していくのを聞いていて、自分がどんどん取り残されていくようで、耐えられませんでした。そんな中、榎村先生が言ってくれたことが、本当に嬉しかったです。「無理に発表しなくてもよい」という言葉が、私にとってはありがたかったです。でもこの言葉にいつまでもあまえているわけにはいかないとします。けれどまだ今は発表できません。今発表したくありません。今発表しても、周りの人が言ってるから自分も言わなければいけないというような気持ちだからです。そんな気持ちの発表は嫌だから、早く自分が何を伝えたいかということを見つけないです。』

※

この全体学習をむかえるにあたって、事前授業の中で一人の女の子が「学習会の部落問題学習に行ってみよう」と打ち明けた。実はその言葉は、多くの子が思っているがタブーのようにして言えなかった、言わなかった言葉であった。その一人の子の発言が、次から次へと反響を呼んだ。私も行ってみたい。私も行ってみたいと……。

※

『学習会へ行って来るって言ったら、私の親はなんて言うだろうと思いました。きっと「何しに行くの？」って聞いて「行くな」ってはっきりは言わなくても、ひつこく言いそうな気がしました。すぐには「行ってこい」って言わないと思います。親は子供のために言ってくれているつもりでいると思います。予想通りにはならないことを願うけど、親にとにかく聞いてみます。思いを伝えるっていうことは、相手を安心させるんだと思いました。友達のあった事をいろいろ聞いていて、自分は経験が少ないというか、知識が少ないような気がして、ちょっと嫌だったです。テレビを見るにしても、本を読むにしても、そういう事に敏感にならなければと思いました。』

※

『水曜日は学習会の話がほとんどで、その中で学習会に参加してみたいという意見が出てきて、私はその時嬉しかった。でも私はその時本当に嬉しいんだろうかって思いました。嬉しいけどやっぱりどこかに不安な気持ちがあった。参加したいっていう子が、学習会に行ってみるって家の人に言ったら、どんな反応を示すだろうか？と思って、私には行かせてくれるよりも、反対する状況を一番に想像していました。家の方が賛成してくれて参加するのはいいと思う。でも家の方が

反対して参加してくれて嬉しいけど、何か引っかかるものがあります。』

※

私自身一瞬躊躇した。部落の子の連帯を深めるためには、学習会に行っている子達だけの会でなければならないのではないかと感じていたからだ。しかしそれだけではやはりいけないようにも思う。部落の子、部落外の子、共にこの問題について真剣に学習してこそ、真の意味があるのではないかとも思う。迷う日々が続いたが、卒業生のこの手紙を読んで踏み切りがついた。

※

『昨日同和教育主任の先生に呼び出されました。うちの高校にも友の会みたいなのがあって、もう2年生が引退だから入らないか？という誘いでした。先生にすれば、毎年大体地区の子しか入っていないから、私は入りにくいかなと思ってたらしい。けど、喜んで入りました。地区内外なんか関係ないでしょ？学校がそうやって枠をつくるからダメなんじゃない？部落解放されたのだったら、もう同和地区なんかないはずでしょ？私、そういうの関係ないと思う。同和问题学習は、みんなやってこそ意味があると思うんです。今は地区の人だけが差別にあってるんじゃないでしょ？少ないかもしれないけど、結婚するにしたって、差別があることで、地区の人も、地区外の人も苦しんでるんじゃない？だから全然抵抗ない。同和问题学習ができるのだったら、友の会が私一人でもやります。』

※

確かにその通りである。真剣にやる意識があり、それを求めているのであれば、枠なんか取り払い、共に学習していくべきものだと思う。下に、学習会での同和问题学習に初めて参加したことについての地区外の子の記録ノートと、それを受けての地区の仲間の記録ノートを記す。

※

『今日は学習会の会場に入るまで、すごく緊張していました。行きたいと言ったけど、本当に来て良かったのかなあとか、中に入ったらみんなどう思うだろうかと思いました。それに私達がいることで、自分の意見が言いにくくなったらしょうとも思いました。でも、みんな意見をどんどん言ってくれて、たぶんいつもと全然変わらなかったんじゃないかなあと思います。だからそういう雰囲気だったから、私も自分の意見っていうのが、凄く言いやすかったです。それでKMちゃんが「これまでは2人だったけど、4人増えて6人になった。」みたいなことを言ってくれたのが嬉しかったです。自分を認めてくれるというか、期待してくれてるというか、頼りにされいるみたいなそういう感じがあると、なんかどうしても、応えてあげたいというように思ってきます。

AやEやCとか、登校拒否の子がいるって言ってたけど、それで何もしてあげられないとも言ってたけど、私もそうだと思いました。私は、手紙とか届けに家に行ったりしただけで、ただそれだけで、実は何もしてあげてないなあと思いました。TMさんが学校に行こうとする雰囲気が、Fになればいけないし、学校に出て来ても、しばらくしてまた来なくなるような、そうさせる雰囲気があってもいけないと思います。だから、今F組は、同和问题についてだけに限らず、一つにまとまる必要があると思います。そういう意味で、11月3日の遠足は、何かのきっかけになればいいなあと思います。遠足は凄く楽しみです。今日は本当は6:00~7:30という予定らしかったけど、時間がたつのが凄く早かったです。最後にKS君が言った言葉だけど、あれはKS君の本音だと思うし、みんなの心の底にある隠しているような心だと思います。そういう心でもいいから、どんどん出していけばいいと思います。

今日は帰るのが遅くなったけど、学習会に行って良かったなあとと思います。これから勉強とかにますます忙しくなるけど、また行っても邪魔じゃなければ、参加したいと思います。』

※

『今日また仲間が増えて嬉しかったし、学習会に入っていない子が学習会に来るっていうのは初めてで、どんな話し合いになるのかと思っていました。けど、前よりもいい話し合いだったと思います。またできたら参加してほしいと思います。それで今度はクラスでそんな話し合いをしたんです。今日また泣いてしまって、発表しながらこらえていたけど、しゃべるにつれて涙が出て来たけど、それは今日あの4人が来てくれた喜びの涙であつたと思う。あの4人にありがとうって言いたい気持ちでいっぱいです。』

6 強制から共生へ（前編）

前章の最後から2番目の文中に登校拒否のことが出てきたが、その子を含め、我がクラスで常に苦しい立場にあった子のことについて記録しておきたいと思う。

秋に入った頃、私は自分のクラスに対して凄く不満を抱いていた。その原因は、発表をする顔ぶれが固定してきたことであり、病的な機能障害をもった子に対しての取り組みであり、登校拒否に陥った子に対しての取り組みであった。当時、クラスの問題について話し合われるべき学活の時間についてもクラスの問題として提議されなかったし、道徳の時間にしても心の拠り所としてより多くの仲間をつくっていこうと、懸命に発表し続けている子に対して、何も応えなかった周囲の者があつた。無関心に思えてきたのである。そんな状況を見るにつけ、だんだんと私の感情は高ぶっていった。確かに6月15日を境に、気持ちが沈んでいくことは予測できていた。その上夏休みをはさむことで、余計に沈むであろうことも予測できていた。受験体制に入っていくことも一つの要因になるであろうことも予測できていた。しかし、洗い続けねば垢はつくということ私は知っている。常に磨き続けねば、輝きは失われることも私は知っている。行動にうつさなくても、思いをもっている者はいるということはわかっていて、が、どうして応えない？どうして行動にうつさない？私にはそれがはがいくて仕方がなかった。やれるべきことは無限に想像できるはずである。見舞いに行くもいいだろう。電話をするもいいだろう。休みの日に遊びに行くもいいだろう。発表をつなげるのもいいだろう。毎日の生活の中で、声を掛け合うだけでもいいだろう。その他にも豊かな発想をしていくことで、いろんな取り組みが可能になると信じていた。それをどうしてしようとししないのか？私はもう心の内にもっているものを全て出したつもりであつた。それなのに何故お前らは出してくれない？いつしか叫びとなっていた。その時、以前にあった出来事が閃光のように私の頭を走った。「みんなだって、僕がいないほうがいいと思ってるだろ。」機能障害をもった子がやけを起こしたときに、クラスで話し合いをした。その時に彼がうつ向きながらつぶやいた言葉である。彼の思いを代弁するつもりで、また全員を試すつもりで、教師として言うてはいけないであろう言葉を吐き捨てるように言った。「いなくなったらいいと思ってるんじゃないか？そしたらお前らも楽だよな。」さすがに言いにくかった。自分の過去を語るのと同じくらい苦しかったし、一瞬心臓が縮こまった気がした。他にも登校拒否の子のことについてや、発表をリードしてくれている子のことについても、極端な（本当はそれが本心かもしれないが）発言をした。そして「もう信用しない！！」とまで言った。さすがに次の日は不信感を抱いたのか、あゆみも記録ノートも提出が少なかった。そしてその少なかった反応について、また次の日発言した。「腹が立ってはいないのか？あんなことを言われても何も思わな

いのか？本当は何か感じたから、あゆみも記録ノートも出さなかったのではないか？！」そして、私自身が冷静になって考えたことを語った。「昨日の発言はやっぱり自分自身おかしいと思う。どんな状況になっても冷静に話し合うことを、自分はこの春、両親と話しをするなかで学んだはずだった。昨日また同じ過ちを繰り返してしまった。今日になって言うが、やっぱりみんなを信じようと思う。」次に記す文は、あくる日のいくつかの記録ノートの一部である。

※

『先生の昨日言ったことは、凄く腹が立ちました。「どうしてこんなこと言うの」とか思って、おもいっきり頭にきてたけど、家に帰って考えてみると、こんなことを言わせたのって私達なんだと思って、凄く辛くて、苦しかったです。今日学活の時、KMちゃんが「つぶされそうで、3Fでいたらだめになる」と言ったとき、私がこんなふうに思わせているんだろうかと思うと、本当に涙が出そうになってしまいました。それで学活が終わった後、KMちゃんとそのことについて話しました。KMちゃんは「そんなことはない。私が言ってるのは、発表してくれない子になるの。」と言って二人で泣いてしまいました。KMちゃんは、今悩んでることをいろいろ話してくれて、頑張ろうと約束しました。本当にこの時嬉しかったし、自分を変えようと思いました。KJさんやTTさんとも話をして、頑張ろうって言った時、なんか絆ができたようで、嬉しかったです。今日の全体学習は、発表するのが凄く手間取っていて、手がとても重くて、なかなか挙がりませんでした。でもKMちゃんが「一緒に発表しよう」と言ってくれた時、なんか手がスッと軽くなって、発表することができました。今日はKMちゃんに支えられたので、少しでも支え返せるようにしたいです。今日一日、KMちゃんといろいろ話して、今まで知らなかった面のKMちゃんが見えて、毎日苦しい思いに耐えていると分かりました。ほんとこのままだと、KMちゃんダメになるかもしれないし、KMちゃん、学校来るのが嫌って言っているの、私が頑張ったってどうにもなるわけないかもしれないけど、頑張りたいです。』

※

『私がノートを出さなかったのは、先生の言うように、はがいいから書きませんでした。それと今日、何を書いても言い訳にしかならないと思ったからです。もうこれで、3回ぐらいこんなことを繰り返しています。いつも先生の“発表しないやつは信頼できない”とかいうことを聞くと、この勉強がいつも一気に嫌になる。嫌いになる。うつとうしくなる。でも、そんなことくらいで嫌になる自分は、やっぱり真剣じゃないんだと思います。私は、周りの雰囲気を押されて、真剣になったような振りをしてたのかもしれないと思います。もうこの時期になってこんなこと思ってる自分ってすっごくはがいい。なんかもやもやして気持ち悪いし、いつまでもいつまでも一緒に場所にいるようです。』

※

『昨日は、記録ノートは書きたくなかった。腹をたてていたとかそんなんじゃないけど、先生の言った言葉は、私にとっては悲しいものだったから、その気持ちを書いて残すことは嫌だと思った。「いなくなったらいいんじゃないか？」私もそう思ったことがあります。小学校から今まで同じクラスなのは、たぶん6年です。だからもういい加減、SU君の事をいろいろ考えるのはめんどうだった。でも、みんながほっとけば、どの先生も怒るし、どうしたらいいのかわからなかった。同じ地方だから、家の人も割とSU君の事を知っていて、おじいちゃんと同じで糖尿病だから「たいへんだな。」と言ってたし、実際見えていても、全然背も高くなってないし、細いし、それに最近体調が悪くて、ほとんど学校には来れてないし、本当に大丈夫かなって思った。そんな時

に「いなくなったらいい。みんなだつて楽になるだろ。」と言われて、悲しくて辛かった。私も思った事はあると書いたけど、冗談でもそのことは口にした事はなかったのに、教師という立場の人が、たとえ本当の気持ちでなかったとしても、私にとっては悲しい言葉だった。でも一瞬、本当に楽になるのかなと考えた。けど、よけい苦しくなると思う。OMさんが言っていたように、人はものを忘れていくけど、でも、本当に楽しいとか、悲しいとか思ったことは、いつまでたっても忘れずに残っていくと思う。

私が小学校2年生の時、男の子が病気で亡くなった。入院していて退院した時の、にこにこして学校に来た時の顔が忘れられない。亡くなってお葬式に行った時、その子のお母さんとお姉さんが泣いていた時のことが忘れられない。その時、初めて人が死ぬということに直面して、人が死ぬということの悲しみが、その子のお母さんとお姉さんを見ていて分かった。「みんなだつて、僕がいないほうがいいと思ってるだろ。」今考えてみれば、SU君は小学校の時からよく「帰る」と言っていたように思う。SU君は敏感で、私達の気持ちを感じとっていたのだろうか。TMさんのことは、転校したらいいと思ったことはなかった。TMさんが休み始めたとき、登校拒否なんて思ってもみなかった。体育祭の前日になって、正直言って「明日も休んだら長縄たくさん跳べるかなあ。」と考えてしまった。それで、優勝できたことをTMさんに報告することは「あなたがいなかったから優勝できました。」と言うみたいで嫌だった。遠足で文化の森に行った時、文化の森駅から文化の森まで二人で歩いた。その時TMさんが「学校楽しい？」と聞いてきた。私は「楽しいよ。テストいっぱいあるけどね。」と言った。本当はTMさんが学校に来たくるような事を言いたかったけど、何を言ったらいいのか分からなかった。後で、どうして何も言えなかったんだろうと後悔した。でも、今でもあの時なんて言えば良かったのかは分からない。遠足の時も、なんか考え事しているように思えた事が何度もあった。その時なんて声かけていいのか分からなかったし、TMさんの考える姿を見て「学校に来てくれるのだったら、私は何をしたらいい？何したら来てくれる？」と本当に思った。

私にはまだ分からない事がいっぱいあります。特に人の気持ちなんて読めない。だからみんなには、もっと言葉で表してほしいです。人間が動物と違うのは、言葉で自分の気持ちを相手に伝える事ができるということだと思います。あゆみに、人は何のために生きているのかということを書いてたけど、SU君はたぶん、今を一生懸命に生きるために生きているんだと思う。たぶん、私もみんなもそうだと思う……。』

※

それから少しずつではあるが、クラス全体の、または個々の取り組みが始まっていったように思う。ちなみに後になったが、11月3日に我がクラスは学級遠足として、生徒が企画して文化の森へ行っている。

※

『11月3日以来、ずっとTMちゃんのことを忘れていたような気がします。家の方にも行ってないし、電話などもしてないし……。11月3日の楽しかった時間を、その時だけのものになっているようです。このごろTMちゃんのことを私には関係ないって思っているような気がします。11月3日で終わったのではないのだから、まだまだこれから頑張らなくてははいけません。また前のように、プリントなどを家に持って行ったりして、一緒に話をしたいです。みんなもTMちゃんの家へ行ってほしいなって思います。男子も行ったらいいんじゃないかなあって思います。』

※

この文章を帰りの学活で紹介したら、反応が返ってきた。

※

『今日、SKとYSちゃんと一緒に、TMさんの家に電話をした。あんまり話という話はできなかったけど、元気そうだった。これからも週に1度くらいは電話していこうと思う。たぶん3人くらいでかけると思う。やはり、TMさんが学校に行きたいなと思うようになったらいいと思う。無理矢理に学校に来てもしんどいだけだから、そうならないよう僕らが取り組んでいかねばと思う。』

※

またある男の子のあゆみには、こんな文章もあった。

※

『今日は、SUが久々に来た。やっぱりSUが来たら、クラスの中がおもしろかった。SU毎日来られるようになればいいと思う。それと同時に、TMさんも来れるようになればいいな。』

※

『今日家に帰って、家にあるカレンダーの11月3日の所に、『遠足』と書きました。するとお母さんとおねえちゃんが「どうしてこの時期に遠足なんかするの。」って聞きました。だから「みんなも行きたかったし、先生も言ってくれたし、学校へ来にくい子のためにもいいから。」って言えば「学校に来れない子がいるの。」って聞くから「いる。」って答えた。すると「どうしてそんな子のために、みんなで行事決めたりするの。ほっとけばいいのに。」って言った。もう、私の家族と言っても、父以外はみんな差別者です。未だに「どうして全体学習なんかするの？板中は他のことに力いれるから、成績も悪いんじゃないの？」ってよく言われる。平気で差別的な発言をする。おねえちゃんはA中、J高と、あまり同和問題学習を真剣にやってきていない学校で育ってきたので、凄いひどい発言をよくします。おばあちゃんは部落がどうだこうだ言うし、最低な家庭環境だとよく思います。だからおねえちゃんに「じゃあ友達が学校に来れなくなってもほっとける？」って聞いたら「何度かは行くけど、きっとそんな子友達やめる。」っていうんです。ひどいなあって思います。自分さえよければいいという考えが大きいんだろうと思う。それに「板中は同和問題学習しても、所詮差別する子される子、共にいっばいいるんじゃないの？」と言われた。おまけに「そういう子やがいるから、社会は成り立っていく。」とまで言った。「差別がなくなったらおもしろくない。」だとか平気で言うから怖い。だから、1回板中の全体学習見に来てって言ったら「そんなの行くぐらいなら、寝てるほうがまし。」って言われた。おねえちゃんの友達とかは部落差別を知らない子もいるし、ないと思ってる子がほとんどらしい。私つくづく板中来て良かったと思う。おねえちゃんみたいな人が大人になったら恐ろしいと本当に思う。どうやったら私の言うこと分かってもらえるか考えています。でも、私の家族でおねえちゃんと同じ考えの者が私とお父さん以外なので、心細いです。お父さんは今こっちにいないし、私一人です。1対2です。その上最近はおねえちゃんも私の顔見る度、勉強勉強言うので、凄い家に帰るのが嫌いです。私の家庭がこんなのだと、KMちゃんやYYちゃんに言ったら私、学校に来れないようになるような気がする。でも、何とかして分かってもらおうと思います。』

※

私自身、中3生の受験生を受け持って、勉強勉強言わねばならないのだろうかというプレッシャーを感じながら生活している。しかしできる限り言わなかったと、自分では思っている。ただそれがいいとも思えないが……。ただ言えることは、同和問題学習に真剣に取り組めるのなら、学力は向上するということだ。同和問題学習と学力にどういう相関関係があるのか？と不思議に思

われるかもしれないが、私はこう考える。同和問題学習というものは、自分を素直にする学習だと。素直になるということは、自分自身が反省できるということであり、真摯な態度になるということである。そしてこの学習は、自分以下を求めない生き方をしていく学習でもあり、常に自分自身を向上させていく学習であると思う。本当にこの学習の意味が理解でき、身につけているならば、生きる目標をもつことができるだろうし、今自分が何をせねばならないのかが分かってくと思う。そういった目標や、人間として生きていく確かなものを見つけようとしないうちに、学力だけを向上させようとしている者の方が、むしろ私は恐い。そういう者に占められ、それが普通となってしまう社会が恐い。統一規格製品を作る世の中は終わった。もっとも人間としての、人間らしさが認められていく世の中にしていかなければならない。「出る杭は打たれない、障害のある者はそれを個性として、学校に行くことだけが全てでない、そんなことも認めていければと思う。最後の章で進路公開の報告をするが、本当に最高の進路決定とは、どれだけ自覚をもって自分の進路に向かって努力していこうとするかということだと思う。それに比べ、今のわが国のトップに立つ人間を見ると「本当にこれでいいのか？このままでいいのか？」と思ってしまう。ニュースには毎日のように不正が告発されている。確かに、本当に素晴らしい人もいるのだろうが……。私一人の力は、あまりにも小さい。私一人がどうあがいても、どうにもならないとも思っている。しかし、せめて自分にできることをしていこうと思う。一人の力は小さいが、2人3人と連帯していくことで、その力は5倍10倍となっていくことを私は知っている。そういう取り組みを、私は続けていこうと思っている。

7 強制から共生へ（後編）

最後の全体学習が11月25日に行われた。その中で、またいろんな思いが吹き出てきたのであるが、その時に、前章とこの章に使ったタイトルが思い起こされた。「強制から共生へ……」

1年の時に担任していたある女の子が、この全体学習で苦しい思いに耐え、自らの兄弟が障害をもっていることを口にした。苦しかっただろう……。身に詰まされるような思いがした。私は「もうこの障害者差別のことは全体学習では語られることがないのだろうか？」とあきらめかけていた。いろんな差別について考える上で、必ず出てくる話題であった。その上、この学年には、障害者と何らかの形で関わっている者が多いことを、私は知っていた。この女の子のことも……。これは教師の勝手な注文かもしれないが、誰かに、障害者差別のこと、自分の家族のことを語ってほしかった。そして、今まで人に言えなかったこと、隠してしまっていたことが、実は自分の差別心であり、それを乗り越えずして自分自身は解放されないし、当の障害者も解放されていくはずがない。障害をもっているということは、恥ずかしいことなのか？！私自身悔しくて悔しくて仕方がない。ただ、そのことを口にするには、やはり辛いものがある。何故か？それが、私達を含む世間というものが作った壁なのである。またそれに汚染されてしまい、今の状況を本当に辛いとしか思えないようにさせてしまったのは私達自身なのである。そういったことが普通に語られる関係を、私達は小さいながらも作っていかなければならないと思う。これまでの、普通と言われている価値観の押しつけが、どんなに私達人間の生き方を不自由にしてきたか……。前章でも述べたが、世の中にはいろんな人間がいることの方が普通なのである。それなのに、自分を基準において、それを普通とし、その普通を強要する。しかしその普通も、実は親から子へ、子から孫へと受け継がれてきたもののなのである。その無限ループをどこかで断ち切っていかなければならない。真の人間として、よりよく、豊かに生きていくために……。

みかん箱から取り出したみかんは、いびつな形をしている。が、いびつだからおいしいのである。

※

『左ききの話しが出てきたけど、私はある子に対して凄く無神経だったと思います。何にも考えないで、その子に右ききの方が有利みたいに言って「右ききになおしなさい」とか言っていました。考えてみればおかしい話です。別に右ききだろうが、左ききだろうが、そんなこと人間である上で、関係ないと思います。左ききの人は、世間は右きき社会なのだという理由で、強制的に右を使うように言われます。私達右ききが左で字を書けとか、箸を使えとか言われても、うまくできません。きっと無理でしょう。でもそれを私達はそれを左ききの人に強要していました。今を思えば、罪の意識がないって恐ろしいことです。社会って怖いと思います。その子には絶対謝りたいと思いました。』

※

それともう一人、悩み続けていた我がクラスの女の子が発表できた。親の勧めで、奨学金を受けられるように手続きしてきた子である。前にも述べたが、30人もいればいろんな家庭がある。しかし、奨学金＝貧しいという図式が心のどこかにあるのだろうか、奨学金のことが、どんどんその子の中に重く積もっていくのが分かった。頭では「別に悪いことはしていないし、何も卑下することはない。」と分かっているし、この学習にもありったけの熱意を日々注いでくれていた。それでも、自分のこととなると重かった。しかし最後の最後になって、一步、その子は解放された。この日の感動をいつまでも持ち続け、これから先も同和教育に関わっていく生き方を貫いてくれることを、私は願う。

※

『今日の全体学習は、たくさんの友達から、身近にあった差別を聞きました。いつでもどこでも差別があることがよく分かりました。YKさんが自分の弟の事を言うてくれて、火に油を差したようにみんなが燃え出しました。親に言うなって言われたけど、負けずに言ったYKさんは強いです。YKさんの心は、弟の心にはなれないけど、弟を分かろうとする事が大切なんだし、それが差別をなくしていくことになると思いました。障害者差別って今まで時間とって勉強したことなかったから、きっとみんな私も含めてだけど、心にたまってたと思う。だからいつもより内容濃かったと思います。学校の設備のことだけど、OM君が言ったことになんか同意してしまいました。トイレだけではやっぱり設備が整っているって言えないと思います。でも校長先生に言っても仕方がないから、町とかお金を持っているところへ行っていかなければと思います。福祉って遅れていると思います。よその国（ヨーロッパとか）に比べたら凄く。前先生が記録ノートに、板野町にありながら板野町にない養護学校って書いてたけど、本当にその通りだなあって思います。普通の学校と養護学校がくっついて一緒に勉強したりできるような社会になったらいいです。障害があったって一人の人間だと思います。いろいろ考えるけど、現実になると、心や体がいうときくかなあと不安です。矛盾しています。矛盾な所を無くすためにやっていると思います。同和問題学習しなかったら、差別の塊になっているし、差別しているのが自分って気付かなかったと思います。大人になっても何らかの形で、こんなこと続けていこうって思いました。

それと最後に、私の悩みの奨学金のこと言えて良かったです。昨日から言ってみようかと考えていて、親に言ってみたら「そんなに思うんだったら言ってみたら？」って言われたりしました。私もそうしようかなあとか時々考えていました。でもずっと障害者差別のこと続いていて、今日はもう言えないのかなあと思っていたんだけど、途中で男の人が前に来て意見言ってくれたのが

きっかけで、言いました。考えていたことの半分ぐらいしか言えませんでした。言った後、みんなの反応がないなあと思って恐怖を感じました。全体学習終わった後、6人ぐらいが「一緒に頑張ろう」って言いに来てくれて、涙が出てきそうでした。これ聞いて勇気づけられたし、たぶん普通に言えそうな気がします。これからも頑張りが続けられるようにしたいです。』

※

『OMさんが6時間目に、自分が高校に入ってから奨学金を借りることになったっていうことを言ってくれた時、私は全然知りませんでした。OMさんがみんなに言いたかったけど言えなかったっていう気持ちを考えてみたら、凄く苦しかったと思います。OMさんが言えなかったのは、私達の作る雰囲気とかが、OMさんに言わせない状況をつくってたのが分かりました。私をもっと早く気がついたら、OMさんは苦しい思いをすることが少なかったと思います。気付かなかった私は、まだまだ小さい人間だと思いました。OMさんが奨学金を借りることでOMさんは変わらないし、奨学金が悪いということでもありません。だからあゆみにも書いたけど、OMさんはOMさんなんだから、一緒に頑張っていこうなって言いました。』

※

よくあるパターンに「私、実は部落民なのよ。」「そんな関係ないよ。」というものがある。果たして関係ないのだろうか？私は思う。その時は確かに嬉しいのかもしれない。しかし長い目で見たとき、その言葉は「私には関係ないよ。」というふうに思えて仕方がない。勘ぐり過ぎで、実際はそうではないのかもしれないが……。しかし本当に関係ないのであれば、その子と強く強くつながり続けていくつもりなのであれば、もっと他に言葉の返し方があるように思う。「一緒に頑張っていこうな。」そんな会話ができ、また本当にその思いが繋がっていくような関係をもっともっと広げていきたい。

8 進路公開

全体学習も終わってしまい、とうとう3学期になった頃に、同僚の先生にヒントをもらい「進路公開」ということで、今の自分の夢や、進路希望を語り合える時間を設定した。

※

『今日の6時間目に自分の進路について発表して、最初はなかなかでてこなかったけど、少しずつ増えてきて、今日来ていた子全員の発表が聞けて良かったです。みんないろいろな夢を持っていて、聞いていながら「次はどんな夢を持っている子が発表してくれるのだろうか。」と楽しみになりました。なんか今日、つくづく夢を持つことはいいことだと思いました。先生も言っていたけど、夢が叶うとか叶わないとかは、別に関係ないと思います。夢が叶えられたらそれ以上言うことはないけど、叶えられないと分かっているけど、大きな夢を持ってしまうときがあるけど、私は、叶えられなくても思い続けるだけでもいいと思います。私も考えれば考えるほど夢は大きくなってしまっているときがあるけど、そんなときは想像しているだけでもすごく楽しい気持ちになってきます。私は、先生が言っていたように、若いときにやりたいことを、たくさんやっておきたいと思います。一回しかない人生を、一つのことをやって終わりにしたくないから、いろんなことをやって満足したいです。夢の話ばかりになってしまったけど、今はとにかく勉強をして、自分の行きたい高校に合格することです。残り少ない時間を大切にしたいと思います。』

※

『今日は自分の夢みたいなものを話したけど、もしそれぞれが自分の夢を叶えることができたな

ら、学校の先生や、音楽関係の仕事、サッカー・バスケの選手、花火師、科学者、医者など、3Fという小さい教室から、いろんな分野に活躍できていくなあとと思います。もしいっぱい有名な人がうまれて「知ってるつもり?!」とかで取り上げられたら、みんな板中の3Fだったとかだったらかっこいいなあとおもいます。』

※

『今日の6時間目に、みんなで夢を話し合いました。夢を口にすることをしたらなんかやる気が湧いてきました。きっと、みんなが認め合えたからのように思います。前より深い仲になれた気がしました。』

※

『今日の6時間目は、みんなの夢を言い合いました。全員の進路というか、夢を聞いたかったけど、残念でした。また聞きたいです。十人十色で、聞いていておもしろかったです。終わってから、この時間はいい時間だったと思いました。けど、自分の進路を言うときは緊張して、足が震えてしまいました。夢を語るっていうのは簡単だけど、実行して達成するのが難しいから、ペラペラとみんな言わないような気がしました。けど、叶わない夢でも頑張っていくっていうのが、大事なんだなと思いました。そして、頑張ったらできなかったこともできるようになるって信じたいです。芸術とか、自分の持っている才能を信じて生かせる人は、私も好きだなと思いました。好きな仕事をやれるっていうのは長続きできるし、ちょっとしたことでもめげない感じがします。私も、自分のしたい仕事を親に言ったけど。半分賛成のようで、半分賛成してないです。けど、自分の決めた道に進みたいので、勉強を頑張りたいです。

それとH君だけど、私は、どんな高校へ行こうと自分で決めたんだから、変には思いません。自信を持ってほしいです。変な目でみる子がいるっていうのは悲しいことだと思います。自分がやりたいことができるっていうのは、すごく幸せなことだと思います。みんなと、少しでも自分の夢が叶えられるように頑張りたいです。』

※

『今日の6時間目は、進路について一人ひとりが語っていく時間でした。みんないろいろなところを希望し、夢を持っています。けど、6時間目の発表は、私にとってすごく辛かったです。辛いことでないのかもしれないけど……。近くに高校あるのに、遠いところ行くんだなあみたいな感じにとられたら嫌っていう気持ちでいっぱいでした。今でもそうです。親にも、他の人の見る目も違うよと言われたし……。』

※

『6時間目にみんなが話して行って、みんな将来のこと考えて、高校を選んだり、その後でどんなことがあるのかとかちゃんと調べていてっていう感じで、私はすごく自分の考えが幼稚で、浅くて、少しずれているようで、恥ずかしくて言うのにとてんど感いました。私は、大学に行きたいと思ったのは、ただ大学の生活に憧れているみたいな軽い気持ちだったし、余計に、みんなそんなこと考えてたのかと困りました。言って良かったような、恥ずかしかったような……複雑です。』

※

次の日の記録ノートをいくつか紹介した。実にいろんな夢や希望がでてきた。あんまりに大きすぎて笑ってしまう夢や、突拍子もないような夢がたくさん出てきた。しかしそれでいいのだと思う。ただ進路のこととなると、やはり言葉がつかまっていた。元々言いにくいであろうことは承

知の上で設定した時間である。しかしそこからまた膿が出てくる。それぞれの進路が徐々に決まっていってこの時期。よほどのことがない限りは、互いの進路希望なんか知ろうはずがない。つまりこの時期に進路先のことなんかは、タブーなのである。そこをあえてついた。考えてみれば、一人ひとりの仲間の進路について正面きっては聞けず、陰でコソコソと憶測が流れていく。特に私立なんかにはそんな面がある。この流れは、部落差別が温存してきた流れとよく似ている。しかし自分の夢と重ね合わせて発表していくことで、自分が何のために進学しようとしているのかを再確認できただろうし、しっかりとした自覚や意識をもってこれからの日々を頑張っていけるようになったように思う。また素晴らしかったのは、仲間の夢や希望を聞いて、自分も頑張らねばという相乗効果が起きたということである。このことは、互いを認めているということであり、尊重しようという姿勢であるように思えた。

しかし予想はできていたが、残念であったのは今の自分の進路希望に胸を張り切れない子達がやはりいたことだ。自分の夢にすら胸が張れない子もいた。大人は、子どもに対して安全な道を歩かせたがる。特に親のわが子に対する思いはなおさらだろう（教師も同じであるが）。したがって安全な道に進むための横道は全て悪いものなのである。本当は悪くはなくても、悪いものとして子ども達の耳には入り込んできているのである。つまり自我の目覚めがなければ、子どもの決定の中には多分に大人の密かな思いが含まれているのである。そして大人の差別心までもが。そしていつしか気付くであろう、そういう生き方をして苦しんでいることに……。そしてもし自分が安全だと思っていた道から横道に外れてしまわざるを得ない状況に陥ってしまうならば、その人にとっての人生というものは、本当に惨めなものになってしまうだろう。そしてそれは子どもにそっくりそのまま反映される。つまり子どもも惨めになってしまうのである。大人に見栄や世間体を気にすることがなければ、子どもは本当に伸び伸びと育つことができる。そうさせてくれない親子関係が本当に多いように思う。つまり親子して、世間に毒されているのであると思う。

そんな中で、せめて私達教師にできることは、本当の進路指導をしていくことだと思う。私自身、進路指導とはとにかく学力をつけ、より良い高校に（教師にとって）進めることのように教わってきたし、また自分もそうしてきたように思う。私に進路指導をされてきた生徒の中には、しんどい思いをしながら高校へ通学している者もあるかもしれない。申し訳ないことをした。しかし終わったことを悔やんでいてもしかたがない。だから私は、今の子達にしっかりとした目標や自覚をもって、堂々と通学できるような心の力をつけてやりたいと思った。そして、そうするために、この感想を1枚のプリントにまとめて、次の週に再び授業をした。

※

『私は最初、進路のことについて発表するのはあまり好感がもてなかった。それは、みんなの前では言いにくい子がいると思ったからです。私は、これといって夢はありません。今は高校に受かることが一番の願いです。いまI校目指して頑張っているけど、最近まで、N校だのD校だの、S校だのコロコロ変わって、自分でも飽きっぽい性格だなあと考えた。』

私の親は、D校とかA校を、悪いところと思っています。だから私が「D校にしようか？」って言えば、すぐく反対しました。どうして、悪いとか決めつけるんだらう？って思う。何も知らないのに、知ったようなことと言って、私はすぐく腹立たしい気持ちになりました。なんか、D校とかA校とか行ってる子が馬鹿にされてるみたいで悔しかった……。でも、私は親に何も言い返せなかった。自分がそんなことないって言うてるとどこかに“悪い高校”と認めてたから何も言い返せなかったんだと思う。だから、月曜日みんなの意見とか聞くまで「言いにくい子がいるのでは？」って思ってたのは、自分がどこか差別してたからだと思う。その考えが間違ってることに気

付いたのは、みんなの進路とか夢とか聞いた後だった……。なんかスッキリした。あー良かったなあーとも思った。先生が話してたとき涙でそうになった……。高校でその子が悪いとかは決めつけられないもん。悪いっていう証拠はどこにもない……。高校とかで人間が認められないのは、辛いこと……。今のクラスの子達だけでも、信じ合い、支え合いたい。もう二度と同じ教室で、机を並べて勉強することもないから、今って時間もっと大切にしていきたい。勉強も大切だけど、もっと大切なものがあるはずだから、見失わずに生きていきたい。そして卒業してバラバラになっても、連絡取り合ったりして、終わりににはしたくないなあ……。前の月曜日は本当に良かった。みんなの夢とか聞けたし、自分の差別心とかに気付けたし、残りの短い時間でやりたいことを見つけられたし……。』

※

おそらくクラスのほとんどの子が同じ思いを抱いて授業にのぞんでいたと思う。しかしそういう思いを抱くことすら、自分の中の差別心を見つめることになっていたんだと思う。

そんな中、自分の進路希望に胸を張れなかった子が、1週間の時を隔てて、だんだんと顔を上げ、胸を張れるようになってきた。自分の中にある偏見や差別心に気付き、またそれが周りから植え付けられてきたものであって、そういうものに心が支配されてしまうことで、誰でもない自分自身が豊かな生き方をしていけないんだということが分かってきたのである。しかしそこまでの考えにたどり着けたのは、多くの仲間の支えがあったからだと思う。その子自身一つの大きな壁を乗り越えられたように思う。自分の進路がはっきりしてしまうと、どうしても時間を持て余してしまうものだが、逆にその子は、いきいきと自覚をもって生活ができていたように思う。その子達に向ける思いを書いてきた者が本当にたくさんいたのだが、その中から1作と、当人の記録ノートを次に記す。

※

『今日の6時間目、高校のことについて話をしました。OさんMさんが、自分のこれからの進路について話をしてくれました。私は別にS高だってI高だって変わりはないと思います。自分の小さいときからのイメージが悪いだけで、実際そうかっていうとそうでもないと思います。部落問題学習をするようになってそう考えられるようになりました。OちゃんやMさんが言ってくれたことを無駄にしたいはありません。次の日曜日のテスト頑張ってきてもらいたいです。応援しています。私自身先週言ってから、みんなどういふうに受けとめたんだろうって思っています。周りに推薦で行く子とかが増えるに従い、自分の中にねたみが出てきて、腹がたってくるのです。自分が勉強頑張らなかったのに原因があるのに……。それと私が教師になりたい理由ってというのは簡単に言うと、生徒と一緒に差別について話したいからです。そして自分の子供にもきちんと教えていきたいと思ったからです。まだまだ幼稚な考えかも知れないけど、少しでも近づいていきたいです。』

※

『17日の日、初めて進路の話をし、一人ひとりが語っていきました。S校を受けるのは、自分の夢に近づきたいってこともあります。でも、なんとなくみんなの前で言う気にはなれなかったけど、いつかはわかることだし、言ってみるだけ言いました。なんか言わなかったら気持ちがすっきりしないし、言ったけど気が重い気持ちでした。そんな重い気持ちをしているのは、この世界・社会みんなが作ったんだなって思いました。親からっていうのもあるし、親戚の兄ちゃん姉ちゃんていうのもあるかもしれません。でも、日・月曜日で気持ちが重かったのが消えた気がします。それは、今日またみんなの前で言えて、先生の言葉やみんなの言葉が聞けたからです。S校は悪

いところって決めつけるのが悪いということが分かりました。自分にもそんな面しかなかったからです。みんなだって「自分の決めた道で、希望をもっているのならいい」って言ってくれました。嫌な気持ちをした面もあったけど「F組でいてよかった」って思いました。友達ってすごくいいと思いました。日頃バラバラなF組だけど、まとまるべき時には助け合っていけるF組だと思いました。授業が終わった後、友達からいろいろな言葉をもらい、すごく嬉しかったです。S校のことでこだわってきたことが嘘のようです。でも今は信じ合える友達だから、助けてくれ、助けてあげることができます。卒業すると、F組もみんなバラバラになります。信じられる友もいなくなるし、周りの目を気にすると思います。でも、そんなのに負けないように、自分の夢を崩さないように頑張りたいです。自分の弱さや愚かさ、そして周りの目になんか絶対負けない。友達が発表してくれて嬉しかった。でも一番嬉しかったのは、ONさんが言ってくれたこと、OMさんが言ってくれたことが、本当に嬉しかったです。他の子の言葉も、嬉しかった……。』

※

またこの子達の素晴らしいところは、自分達だけの自己満足に終わることなく、それを生かして今度は自分から周りに施せるところであると、次の記録ノートを見て分かった。

※

『今日の6時間目に、前の週の夢のことについて、感想を言い合いました。学歴社会って嫌だなあと思うようになりました。今の社会って、学歴だけでその人の人柄を決めてしまっているような気がします。学歴だけで比べられたらたまりません。でも、今の世の中は、悲しいことに、これはないとは言い切れないと思います。けど、F組の中ではせめてこんな差別はなくしたいし、みんなと闘っていきたいと思いました。ずっと前からONちゃんとMUさんからこの高校に行くか言ってくれていました。何も聞いてないのに言ってくれたのが嬉しかったです。今日もみんなの前で発表して良かったのではないかと思います。言わなかったら、いつまでもひとりだったと思います。二人の後発表したけど、言いたいことがいっぱいあったけど、なかなかできませんでした。もっと自分に発表力があつたらなあと思いました。6時間目が終わってから、外の掃除の子3人と私で話していたら、なんか反対に私のことまで応援してくれて、F組の子っていい友達だなあと思いました。どこの高校行くとしても、みんなプレッシャーや偏見や親を気にしながら、勉強しています。でも、これに負けないで頑張る続けるっていうのが、私たちの目標だと思います。辛いのは自分だけでないと思ったら、どんな苦しいことでも乗り越えられる気がしました。大きすぎる夢でも、幼稚な夢でも、どんなのでも夢を持つのが大事だし、夢を持っていたら、生きる支えになってくるように思いました。』

※

また次のような希望進路の悩みをもっている子もいた。

※

『今日先生が6時間目に「S校に行くやつだって、学歴社会におされてる。S校に行ってるやつだって苦しい。」っていうようなこと言ってたけど、私もそう思っていました。S校に行った子は「やっぱりS校に行っただけのことはあるなあ。」と言われるだけの成績とって、いい進路に進まなければならないって、すごく苦しいことだと思います。』

私は、2年生の頃からS校に行きたいとずっと思っていました。初めのうちは「S校に行かなければ意味がない。」みたいな変なプライドもあったけど、行きたいと思いだしてからは、それだけを目指し、それだけを目指してずっと頑張ってきました。だから自分以下を探さないで、常に今の自分を越えなければいけないと思って、ずっと自分以上を求めていけたと思います。S校

に行くことが、私の一つの夢だったと思います。今、その夢が叶うかもしれない位置に自分がいると、信じています。今までの努力も無駄にしたいと思うし、夢も叶えたいと思うので、S校に行きたいです。これから後少ししか時間はないけど、できる限り頑張ろうと思います。一つ心配なのは、初めに書いたように、もし合格したらのことなんだけど、いい進路に進まなくちゃいけないのかなあということです。よく『S校くずれ』というのを聞きます。「あの子は地元の高校に行った方が良かったのに。」というのをよく聞きます。でも私は、その子がS校を選んだのは間違いではないと思います。人がなんと言っても、その子のことを否定したくはないです。I校の先生は「市内の方は、通学時間が多いので、その分勉強ができない。」ということを書いてたけど、そういうことはその人次第で、I校に行ったら先生が朝夕の補習をしてくれても、やる気がなければ同じだと思います。

私が前、お母さんに「看護婦になりたい。」と言ったときに「それならわざわざS校まで行かなくても、I校でもいけるだろうに。」と言われました。もし私がS校に行ったら、植木に興味をもちはじめ、将来は大学も行かずに盆栽をカットするおばさんになったら、私は「S校くずれ」をしたと言われるのだろうかと思います。周りの子ができるだけ有名ないい大学にはいるとうとしている中で、私は自分の夢を叶えるために人と違う道に進めば「あの子はせっかくS校に行ったのになあ……。」と言われるのでしょうか。自分の夢を叶えるよりも、周りと同じように、他の人から認めてもらえるような道に進まなければいけないのでしょうか。私が盆栽をカットするおばさんになっても、それが夢なら、幸せなら、自分を認めてほしいです。三者面談に使う資料に書かれて「I校に行っても結構いい大学に行ってるでしょ。この子なんて、S校行ったのに、大学も行かずに盆栽カットのおばさんですよ。」とは言ってほしくないです。私は、自分の行きたい高校に行ったら、自分のやりたいように生きてみたいです。三者面談の時に、お母さんが「S校に行ったら、もしダメでも、女の子だから、どこか就職して結婚できたらいいと思ってるんですよ。だから、今はS校に行きたいって言ってるから、行かしてやりたい。」って言ってくれたときは、すごく嬉しかったです。女の子だからという男女差別はあるかもしれないけど「行きたいところに行かしてやりたい。」という言葉がすごく嬉しかったです。今日は、OさんとMさんに言えなかったけど、周りの目なんて気にしないで、自分の思った通りの道をすすんでほしいです。みんなにも、生きて通りに生きてほしいです。』

※

全ての子どもが、様々な思いに揺れながら進路決定をしていく。次に記すのは、新しい世界に飛び込んで行くことに不安を感じながら揺れ、その中でこの授業を通して人間的に強くなっていった子の記録である。

※

『僕はこの前の時間いなかったけど、だいたいこのプリントを読んで分かりました。僕は、みんなの前では言えるかどうか分からないけど、推薦という形で行くのも少し嫌と思いました。今日ONやMさんが言ってたけど、なんとなく分かるような気がしました。あの時は本当に「頑張れ。全然恥ずかしくなんかないし、恥ずかしいと思うな。」と一言言ってあげたかった。でも、後で「頑張れ。」としか言ってあげられなかった。僕も学力はないから、高校行ってもバカにされるかもしれません。けど、全然気にもしてないし、怖いとも思っていない。僕には新しい夢が生まれました。初めはこんなことやめてバレー頑張ろうと思ってたけど、何か何があったのか分からないけど、相撲やって、若の花みたいにかくまう生きていこうと思いました。相撲のこと知らない奴とかは、ださいとか、かつこ悪いとか言う奴いるかもしれません。けど、僕

はこんな奴の前で堂々と裸になり、おもしろいと思わせてやりたい。もうバレーのことは忘れて、相撲一本で頑張ってみせます。』

※

この子が本当に強くなったと感じたのは、次の記録を読むことができたからである。

※

『今日KS君と話をしていたら、高校の話ができました。私はつい「KS君は推薦だから絶対大丈夫だし、私達に比べるとそんなに勉強しなくてすむからいいなあ。」ということをしてしまいました。でもそこでKS君は「推薦だからといって勉強をしなくてもいいことはない。みんなと同じくらい勉強しなければいけない。推薦の子が羨ましいと思うのは自分が弱いということだ。」と教えてもらいました。なんかKS君と話していると、自分が凄く小さく思えて、もっともっと成長していかなければと思いました。私は道德の時間に偉そうなことを言っているけど、結局生活の中でボロッと口に出してしまうようなところがあって、それだったら無理に道德の時間に発表しなくてもいいのにとします。でも、何か思っていることがある限り発表していかないと、もっと自分が小さくなっていくような気がして恐いというのもあるって、発表しています。私が間違った考えをもっていて、それを口に出したときに、KSは「それは間違ってる」みたいなことを言ってくれて、嬉しかったです。自分で気がつかなかったところを友達に注意してくれるということは凄く嬉しいことです。昨日、私が知っているKSと違ったところを見せてくれたような気がして、KSは凄く成長したなあと思ってびっくりしました。KSが何でも言うてくれるから、私も何か言わなければと思って、私は今のところN校に希望しているということを言いました。KSは「頑張れば大丈夫だから、頑張れよ」って言うてくれました。凄く嬉しかったです。なんかお互いにいろんな話をしていく中で、少し分かり合えたような気がします。昨日KSに勉強を教えてと言われて、私は友達に教えてあげるような力を持っていないから困ったけど、私なりに教えてあげました。困った時に助けてあげるのが仲間だと思ったから、嫌な顔をしないで教えてあげたつもりです。教えてあげることで自分も勉強になるので、いい勉強になります。だから、KSが普通に教えてと言ってくれるのが、なんか自然でいいなあと思いました。私も分からないときには、恥ずかしいとか思わないで、普通に質問できるようにしていきたいです。昨日、本当に仲間っていいものだなと思いました。それとKSに「ありがとう。勉強一緒に頑張ろうな。」と言いたいけど、なかなかそれが言えません。KSも応援してくれているし、残り少ない時間を大切にして、応援してくれている人達のためにも頑張ろうと思います。』

※

『6月15日過ぎたくらいからクラスの雰囲気は暗くなったっていうか、同和問題学習しても燃えてくるのがなかったけど、進路公開の時からまた何となく燃えてくる場所があった。けど、私はまた燃えてこないようになってきた。私が思うに、その責任はクラスみんなかもしれないけど、一番悪いのは私だと思う。私の仲良かった子がこの学年違うかったし、同じクラスでもなかったから、私クラスに入って行けなかった。同和問題学習しても、私がクラスみんなに仲間として入って行けなかったから、こんな雰囲気になったのかもしれない。けどその友達と離れて、志望校私だけ言っていなくて、一人で言ったとき、私の後に、仲の良かった子二人と友達が何人か続いてくれた。今では、私の後に続いてくれた友達は本当の私の友達であり、仲間であるって感じています。少ししか続いてくれなかったけど、続いてくれたときの喜びは一生忘れないだろうし、今でも熱く心の中に焼き付いています。この、みんなが続いてくれた瞬間、みんなに謝りたいと思った。今までそんなことに気付かなかった自分が情けなくて、涙が出てきて止まらなかった

たし、喜びで出てきた涙も止まらなかった。その授業終わった後、IKが“ONちゃん、私も言いたかった。”みたいなこと言ってくれたとき、IKも一生私の仲間だって思った。こんなに私にはいい仲間がいるのに、クラスに入っていかなかった自分が今凄くはがいくて仕方ありません。この気持ち、クラスのみんなにも伝えたいです。』

※

この文章にもあるように、3学期に入り進路公開授業をする中で、1度は失いかけていた熱い思いがよみがえってきた。それは当然のごとく、本当に苦しい思いをしている中で、その時の本心を語ったからだと思う。どちらかと言えば、この時期の受験生には道徳も学活もなく、ただひたすら受験勉強に励むのみのような面があるが、この子達は最後の輝きを求めるかのように、最後まで語り合い、つながっていかうとした。そして事実つながっていった。私自身、この授業がこれほどまでに多くのものを与えてくれるとは思ってもみなかった。私が何を言うまでもなく、休み時間は教え合い学習をし、進路の決まった者は自覚をもって自分にできることをしていた。同和問題学習をしていく中で、一番楽な思いをしたのは実は私であったのかもしれないと思ってしまったりした。

8 閉 扉

この一年を、流れを追って生徒の声と共に記してきた。それもこの章で終わりである。

本当にこの一年も、いろんなことがあった。これまでに書き記した以外にも、遠足で拾ってきた子犬に「ねぎ」という名前を付け教室で飼って、多くの先生方に迷惑をかけたこともあった。この時は、学活という時間の重要性を生徒に説いた。学級活動とはつまり、生徒による生徒のための時間である。にも関わらず、そういう取り組みを経験してきていない子ども達に、本当の学活のあり方を示した。自分達で司会をし、今の学級の問題点を出し合い、それを討論し、対策を練ることによって、より良い学校生活を自分達で掴んでいこうとする時間であるということ。また、ここまで中学校で同和問題学習をしているにもかかわらず、高校へ行けばつぶれてしまうという問題点を解決するために、中学生を連れて高校生友の会へ参加したりもした。また他には、39度の熱を出しながらベンチに横たわって全同教大阪大会へも参加し、大いなる感動と人情を感じたりもした。それに、何と言っても忘れられないのは「南の島から」という演劇を通しての、劇団はぐるま座の人達との出会いである。それまでは、同和教育という枠内で、いろんな差別について考えてきたつもりであった。しかしこの出会いから、同和教育という枠を越えて、社会問題に潜む根源を考えさせてくれた。同和教育をすることから、解放運動へと展開し、完全解放していくことが私達の目標である。それと同じように、平和学習から、平和運動、完全平和へと導いていかねばならない。しかし学校現場では、修学旅行のための平和学習で終わってしまっているような気がする。まだ他にも思い出せばきりが無い……。

この一年も、全体学習という同和問題学習から私は本当に多くのことを学んだ。そして多くの出会いをし、多くの本当の仲間を得た。実は私は数学の教師なのであるが、本年度、郡の数学研究会で研究授業をした。その時の授業であるが、グループ学習で「様々な三角形の内接円を求める」という課題を作って行った。自分達で選んだ形の三角形の内接円を求め、その方法を前に出て発表するのである。別に問題なく授業は終わったのであるが、その後の研究会で他の学校の先生から「どうして前に出て行って発表できるのか？」という質問があった。今では私はそれが当たり前のように思っているが、考えてみれば昔の私であっても、やはり考えられないことであったように思う。しかし私にしる生徒にしる、むしろそれが普通になってしまっているのである。

人前で意見を述べたり、自分を語っていくということが……。本当に人は変わるものである。私自身昔は「中学生は、特に中学3年生ともなれば、手は挙げない。発表はできない。」と決めつけてかかっていた。それが、同和問題学習で発表する時にしても「書いたものを読んで発表するという状況を長く見ていない」というふうになるんだと感じた。本当に人は変わるんだと思う。前に約束しておいた文章を今ここに紹介する。

※

『今日で中学校の同和問題学習は終わりました。3Fで語れる時間もなくなりました。私は3年になって唯一成長したと言えるのは、メモとかせずに発表できるようになったということです。1年生や2年生の頃は、発表は全くというほどせず、全体学習の時も隣の子と話しをしたり、資料の隅に手紙や絵を書いたりしていました。一度ある先生に叱られましたが、その時は無視しました。なぜならまともに顔を合わせたら、大声で怒鳴られそうだったからです。2年の時は、そういうふうな気持ちで受けていました。3年に上がっても初めはそんな気持ちで受けていましたが、ある日そんな自分が恐くなりました。みんな発表して、それに何の感情も持とうとしない自分に……。応えようとしなくて自分に……。うつむいてる自分に……。そしていつか先生が、自分の知られたくない過去を、3Fのみんなに打ち明けてくれたとき、はつきり言って心が揺れた。私は先生に応えなかったけど……。それからみんな、自分の言いたくないことを打ち明けてくれた。「自分は部落の人間です。」と……。泣きながら。ドキドキした。何も応えない自分にまで打ち明けてくれるなんて……。『発表してくれない子も信じています。』と言ってくれるなんて……。凄く嬉しかった。手が震えた。みんなに伝えてあげたいと思った。6月15日、初めてみんなに答えることができた。その日は早く家に帰って記録ノート書いて、親と話したいと思った。今まで何の関心もなかった自分の心に、石みたいなのに、あたたかい光があたってきた気がした。自分に続いてくれる人もいた。氣力が湧いてきた。「これからがスタート。頑張ろう。」と。あれから9カ月。もうすぐ卒業……。自分はいくらも、全然と言っていいほど、みんなの心の支えになれなかったけど、自分を信じてくれる子がいて嬉しかった。みんなに何もできなかった分、高校に入れたらその場で闘っていききたい。みんなを信じて、みんなのことを思い出して……。板中でいて良かった。板野に住んでいて良かった。少し自分が変わった気がする。ちょっと話しがずれた気がするけど、先生にもお世話になりました。私は口先だけでなく、少なくとも親の気持ちを変えていこうと思う。高校での新しい友人とかも変えていききたい。自分にできることをしてみたいと思っています。本当に板中に来て、同和問題学習に取り組めて良かった……。』

※

本当に変わったと思える子達の中の一人である。学年当初は、雰囲気为重かった。しかしいつの頃から、私の知らないうちにどんどん心は成長していた。いつの間にか、自ら進んで手を挙げ、発表するようになっていた。そんな頃から、その子の周りの空気は凄くあたたかそうに思えてきた。自分では「みんなの心の支えになれなかった」と書いているが、私は決してそうではないと思う。目に見えないものなので、何がどうとは言えないが、本当に目覚めている子の雰囲気と、そうでない子の雰囲気は明らかに違う。その雰囲気が感じられるかどうかは、苦しい立場の者にとっては大きい。そういう点で、彼女は大いに支えていったと思う。またそんな子が増えたから、クラスの雰囲気があたたかくなったんだと思う。しかし問題はこれからである。この子に限らず、全ての者について言えることであるが、問題はこれからである。卒業とともに終わってしまう学習であってほしくない。F組で得たであろう大切なものをより自分のこととしてとらえてほしい。そして実践を続けてほしい。究極の目標はそこにある。

3学期に校内映画鑑賞で「学校」を観た。そこには日頃目にすることのない世界が溢れていた。しかしこうやって1年間を振り返っていくと、それは映画だけのことではないように思える。私達が目さえ凝らしていれば。映画だけに感動することのない世界が私達のすぐ周りにも溢れているように思える。そこにどれだけ目を向けようとするか。それができていないと、私達教師は、やはり同じ過ちを繰り返していく。そういう所に目を向け、みんなが互いのことを尊重し、認め合っていくことで今までのしがらみから解放されていく。そんな仲間集団を作っていかなければならない。そしていつまでもつながっていこうとする仲間集団を……。そういう意味で私はこの1年間できうる限り全力でやったつもりだ。ただ不器用なために、うまくこなすことはできなかった。それでもあの子達は自分達なりに全力を出し尽くしてくれた。そんなあの子達が私は好きで好きでたまらない。

※

『私にとって中学校での3年間は、言葉では表しづらいものだった。楽しかったし、悲しかったし、辛かったし、おもしろかったし……。本当に宝箱の中の宝物だった。その中で、一番大切な宝物を出せと言われたら、私は友達を出す。誰もが言うように、友達といったら悲しみは半分になり、喜びは2倍になった。3年になったら、友達が仲間になった。悲しみは1/35になって、喜びは35倍になった。

私はアンパンマンの歌詞が好きです。

「何が君の幸せ 何をして喜ぶ 分からないまま終わる そんなのは嫌だ

忘れないで夢を こぼさないで涙 だから君は行くんだ どこまでも……」

本当はこれを「かんぞ山」に載せたかったんだけど、でもロビンフッドにしました。

「ロビンフッドは森へ行った もしおりこうさんにしていたなら また来てくれるよ」

この意味は、ロビンフッドというのは、友達とか自分の大切な人のこと。森へ行ったというのは、卒業して離れてしまうこと。でも、おりこうさんというか、自分らしく、人間として素直に生きていたら、その離れた人とまた会える、会いに来てくれるよっていうことです。私は、友達は本当に大切だと思ったから、この文にしました。もし、何年、何十年と経って、この校舎が建て直されても、教室や体育館であったことは忘れない。音楽室、図書室、調理室であったことはずっとずっと覚えてる。白の校舎になっても、灰色の校舎であったことは決して忘れない。覚えてる。書き残してなくても、ビデオテープを見なくても、6月15日のことはきっと思い出せる。本当は、できることならあの頃に戻りたいなっていう思いもいっぱいあるけど、今までのことを失敗とは思わないし、無駄にもしたくないから、すっきり爽やかな、ちょっと甘ずっぱいレモン味の中学校の思い出を胸に、3月15日、卒業していきます。』

※

今年も、スクールカラーの茶を身にまとい、光り輝きながら子どもたちは中学校を巣立って行った。私に大きな財産を残して。去年の「峠を越えて」にも書かせてもらったが、こうやって1年間の取り組みを字にして残すことを、以前はしていなかった。面倒だとさぼっていたのかもしれないし、やろうとも思っていなかったのかもしれない。しかし、こうやって残せることは本当に自分の財産となるし、また自分の活力の源ともなる。そんな記録を残せることに感謝したい。

ありがとう。

そして今、峠を振り返り振り返りしながら、また次に開かれる扉に気持ちを馳せながら、延々と綴ってきた私自身の「1993自分記録ノート」を、閉じることにする。

そして所々剥げかかった扉も今、閉じることにする。